ISSN 2188-2525

蔵王町文化財調査報告書 第 24 集

蔵王町内遺跡発掘調査報告書 5

各種開発事業に伴う遺構確認調査（平成 28 年度）

夕向原 1 号墳

寺門前遺跡
上野遺跡
夕向原古墳群
宋膳堂遺跡

2018 年 1 月

宮城県刈田郡蔵王町教育委員会

蔵王町文化財調査報告書 第 24 集

蔵王町内遺跡発掘調査報告書 5

各種開発事業に伴う遺構確認調査（平成 28 年度）

寺門前遺跡
上野遺跡
夕向原古墳群
宋膳堂遺跡

2018 年 1 月

宮城県刈田郡蔵王町教育委員会

序　文

蔵王町内には、旧石器時代から江戸時代に至るまで数多くの埋蔵文化財包蔵地が残されています。これらは先人の生活文化を伝える貴重な「文化遺産」であり、まだ文字がなかった時代の人々の暮らしぶりや、古文書などには記されていない地域の実情を、私たちにありのままに教えてくれるものです。

当教育委員会といたしましても、文化財保護法に基づき各種開発事業との円滑な調整を図りつつ、国民共有の歴史的財産である埋蔵文化財を保護し、保存・活用を図りながら次の世代に継承していけるよう努めているところです。

本報告書は、平成 28 年度に各種開発事業計画と埋蔵文化財の関わりを確認するために実施した遺構確認調査の結果を収録したものです。このうち、個人住宅建築工事計画に伴って調査を実施した寺門前遺跡では縄文時代中期頃の遺構が確認され、集落跡の広がりの一端が明らかになりました。

今回報告する調査はいずれも規模としては大きなものではありませんが、これらひとつひとつの成果を積み重ねていくことが、地域の歴史解明につながるものと確信しております。

また、当教育委員会では、発掘調査成果の公開・活用を進めるため、遺跡見学会や文化財展の開催、文化財リーフレットやインターネットを通じた情報発信など、今後もより多くの町民の皆様に興味を持っていただけるような取り組みを実施して行きたいと考えております。

最後になりましたが、各種開発事業主および地権者の皆様をはじめ関係各位には、文化財保護の重要性について深いご理解を賜り、事業計画との調整や調査の実施等にご協力いただきました。ここに心より深く感謝申し上げます。

平成 30 年 1 月

蔵王町教育委員会
教育長　文 谷 政 義

例　言

1．本書は、蔵王町教育委員会が埋蔵文化財保護調整事務の一環として実施した蔵王町内に所在する遺跡の発掘調査報告書である。
2．本書で報告するのは、平成 28 年度に実施した下記の発掘調査の成果であり、平成 29 年度に整理・報告書作成作業を実施した。
各種開発事業と遺跡の関わりの詳細を確認する目的で実施した遺構確認調査
（寺門前遺跡・上野遺跡・夕向原古墳群・宋膳堂遺跡）
3．本発掘調査とその整理・報告書作成作業は、蔵王町教育委員会が主体となり、生涯学習課文化財保護係が担当した。平成 28・29 年度の職員体制は下記のとおりである。
（平成 28 年度）
教育長　佐藤 茂廣　　生涯学習課長　我妻 清志　　課長補佐　日下 朝男
主幹兼文化財保護係長　佐藤 洋一　　主査　鈴木 雅
文化財専門職臨時職員　庄子 善昭　我妻 なおみ　鈴木 和美　江尻 祥子
文化財作業員　我妻 英子　岩佐 若奈　大沼 恭子　加藤 幸子　菅野 慶一　佐藤 かおる　佐藤 貴美子　松崎 祐二　松田 律子　渡部 真理
（平成 29 年度）
教育長　文谷 政義　　生涯学習課長　我妻 清志　　課長補佐　北沢 夕子　佐藤 洋一
文化財保護係長　鈴木 雅
文化財専門臨時職員　庄子 善昭　我妻 英子　我妻 なおみ　鈴木 和美　江尻 祥子
文化財作業員　大沼 恭子　菅野 慶一　佐藤 かおる　佐藤 貴美子　辰口 創野　松崎 祐二　松田 律子　渡部 真理
5．本発掘調査の整理作業にかかる遺物写真撮影は庄子善昭が担当した。
6．本書の執筆・編集は鈴木雅が担当した。
7．本発掘調査の写真・図面等の記録資料と出土遺物は、蔵王町教育委員会が一括して保管している。

凡　例

1．本書に掲載した遺跡分布図・位置図、調査区配置図・遺構平面図の方位は座標北を示している。
2．本書に掲載した遺跡分布図・位置図は下記の図幅を使用して作成した。
第 3 図：5 万分の 1 都道府県土地分類基本調査　地形分類図「白石」（宮城県、昭和 58 年調査）
第 7・8・10・12・16 図：電子地形図 25000（国土地理院、平成 24 年図式、平成 28 年 6 月 13 日調製）
3．トレンチ配置図・遺構配置図に記載した現況 GL からの深度は、掘削したトレンチ底面の深度であり、遺構残存面と一致しない場合がある。
4．土色の記述は、「新版　標準土色帖（2005 年版）」（小山・竹原 1967）を参照した。
5．土層の記述で、ローム質層の上部で確認されるしまりのない褐色系シルトを褐色森林土、黒色系シルトを黒ボク土と記載した。褐色森林土は本州地域の森林を広く覆う成帯性土壌であり、黒ボク土はこれに草原植生下で局所的な条件が加わった成帯内性土壌である（細野 1994）。いずれも第四系の最上位層を構成する未成熟な堆積層であり、整合状態の堆積条件下では下位のローム質層に漸移する。
6．遺構実測図の縮尺は、それぞれ図中にスケールを付して示した。
7．遺構実測図では、下記の表現方法（パターン）を使用して記載した。
撹乱範囲 ▨：確認した範囲にパターン表示（断面図）
8．報告書抄録に記載した各遺跡の緯度・経度は、地理院地図（http://maps.gsi.go.jp/）で取得した調査地点付近の参考値（世界測地系）である。
9．引用文献および執筆にあたり参考にした文献・報告書については巻末に一括して掲載した。なお、蔵王町文化財調査報告書については巻末に一覧を掲載し、本文中の引用箇所では「町 20 集」のように省略して記載した。

目　次

序文
例言
凡例
目次

第１章　蔵王町の環境と遺跡 ･････････････････ **1**
　第１節　地理的環境 ･････････････････ 1
　第２節　歴史的環境 ･････････････････ 5
　第３節　指定文化財等 ･････････････････ 9

第２章　平成 28 年度の調査概要 ･････････････････ **17**
　第１節　埋蔵文化財保護調整 ･････････････････ 17
　第２節　埋蔵文化財の調査等 ･････････････････ 17

第３章　調査の成果 ･････････････････ **21**
　第１節　遺構確認調査 ･････････････････ 21
　　１．寺門前遺跡　（個人住宅建築工事計画） ･････････････････ 21
　　２．上野遺跡　（太陽光発電施設設置工事計画） ･････････････････ 25
　　３．夕向原古墳群　（遊歩道整備工事計画） ･････････････････ 28
　　４．宋膳堂遺跡　（個人住宅建築工事計画） ･････････････････ 35

第４章　総括 ･････････････････ **39**

引用・参考文献
蔵王町文化財調査報告書目録
報告書抄録

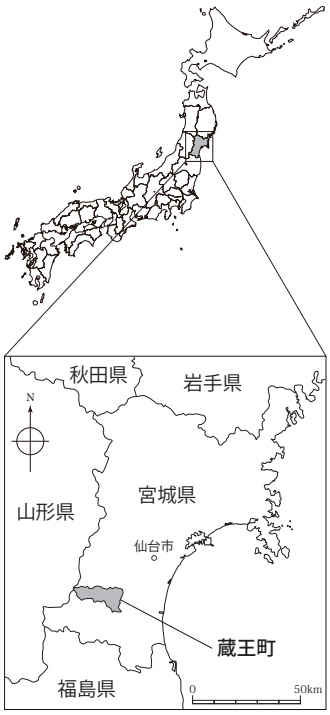
第 1 章　蔵王町の環境と遺跡

第 1 節　地理的環境

位置　蔵王町は東北地方南部太平洋側、奥羽脊梁山脈に連なる蔵王連峰の東麓に位置する（第 1 図）。行政区分では宮城県南西部の刈田郡に属し、西側で山形県境と接する。県庁所在地の仙台市からは南西約 30km の距離にある。明治 22 年の市町村制の施行以前は宮・曲竹（まがたけ）・矢附（やづき）・円田（えんだ）・塩沢・平沢・小村崎の 7 か村に分かれていたが、単独の宮村とこれ以外の 6 か村を合併した円田村に再編された。昭和 30 年には宮・円田村が合併して町制施行され、現在の町域となった。町域は東西に長く、東西 23km、南北 13km、面積 152.83km^2 である。

地形・地質　町域内の海抜標高は最高点が西端の屏風岳で 1,825m、最低点が南東部の松川と白石（しろいし）川の合流点で 20m を測る。大まかに見ると、西部は蔵王連峰の山岳地帯（標高 500m 以上）と高原地帯（標高 300 ～ 500m）、東部は丘陵地帯（標高 300m 以下）となっており、町域を貫流する河川流域に小規模な盆地と河岸段丘からなる平野を擁する（第 2・4 図）。

地目別に見ると町域の 57.1%（87.6km^2）は山林であり、田が 7.2%（11.0km^2）、畑が 11.4%（17.5km^2）である。山林の約半分にあたる 44.5km^2 が国有林となっている（註 1）。果樹栽培と稲作が盛んな地域であり、丘陵部では山林を切り拓いた果樹園や畑がモザイク状に分布し、盆地底面や低位段丘面の平野部が畑や水田として利用されている。また、高原地帯では酪農や高原野菜の栽培を行なう牧草地や畑が拓かれている。

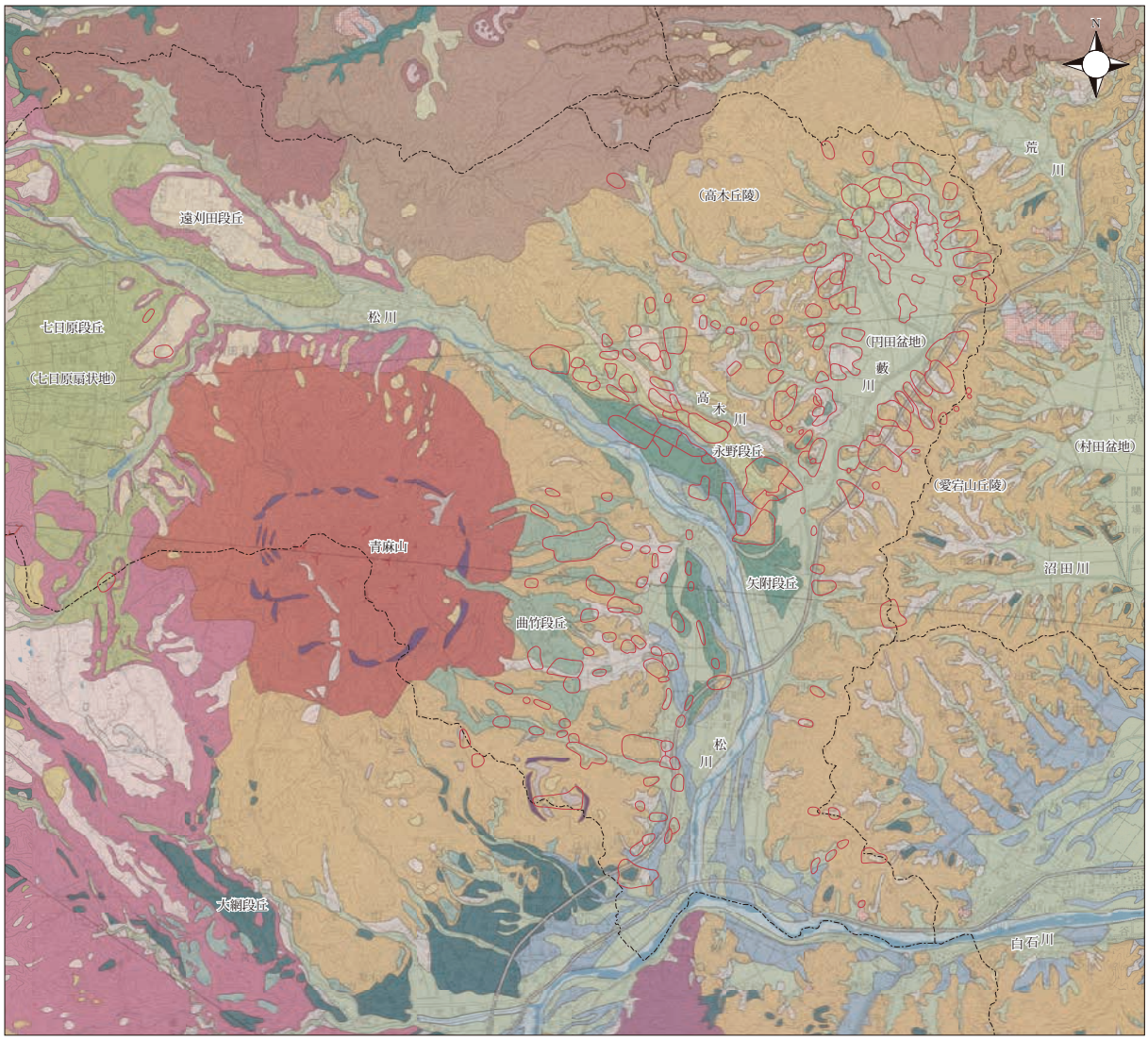


第 1 図　蔵王町の位置

町域の大部分を支配する地形は西部の蔵王連峰の山々と南部の青麻（あおそ）山である。宮城・山形県境を南北に連なる蔵王連峰には多数の成層火山が存在し、青麻山を含む蔵王火山群を形成している（伴ほか 2015）。このうち最高峰の熊野岳（1,841m）を中心とする鳥兜山・五郎岳・地蔵山・五色岳・刈田岳などの山々が蔵王山（蔵王火山）と総称されている（註 2）。蔵王火山の北方には龍山火山、雁戸山火山、北蔵王火山（神室岳・大東岳など）、南方に南蔵王火山（後烏帽子岳・杉ヶ峰・屏風岳・不忘山など）、冷水山火山、西方に西蔵王火山が隣接し、南蔵王火山の東方に青麻火山が位置する。

第 2 図　蔵王町

蔵王火山群の活動は約 100 ～ 200 万年前に始まった。最新期の活動は蔵王火山で



山地及び丘陵地

（蔵王火山）
- 山麓丘陵地

（青麻火山）
- 山地
- 尖頂峰
- 火山性急崖

（非火山性山地）
- 奥羽山脈の山地(峩々)
- 大鳥谷山地
- 山頂平坦地(大森付近)
- 大萩山山地

（非火山性丘陵地）
- 高い丘陵地
- 低い丘陵地
- 頂部平坦地
- 高位谷底
- 旧火山性急崖

低地
- 河岸平野・谷底平野（後背湿地を区別した区域では自然堤防）
- 後背湿地
- 河原及び堤内地

台地及び段丘
- 高位段丘

（蔵王東麓段丘群）
- 火山泥流台地(弥治郎泥流台地)
- 遠刈田段丘
- 七日原段丘
- 川原子段丘
- 蔵本段丘
- 大網段丘

（松川段丘群）
- 永野段丘
- 曲ヶ竹段丘
- 矢附段丘
- 低位段丘

その他
- 人工平坦地(主として切土による部分)
- 人工平坦地(主として盛土による部分)
- 支倉川流域と荒川流域の間の崖線

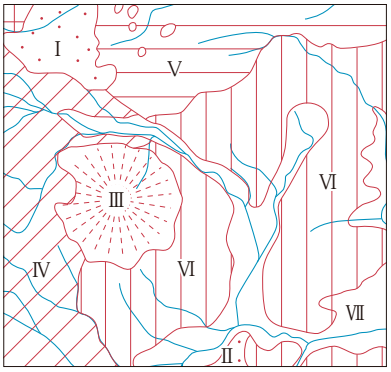
遺跡
- 遺跡範囲（蔵王町域内のみ）

行政界
- 市町の境界

1:100,000

2000m　0　2000　4000

この地図は、国土調査による 1/50,000 土地分類基本調査（地形分類図）「白石」（宮城県 1983）を使用して作成したものである。



行政区分図

地形区分図

Ⅰ　大鳥谷山地
Ⅱ　大萩山地
Ⅲ　青麻火山
Ⅳ　蔵王山麓丘陵地
Ⅴ　高い丘陵地
Ⅵ　低い丘陵地
Ⅶ　白石川河岸平野

第 3 図　蔵王町の地形区分と遺跡の分布

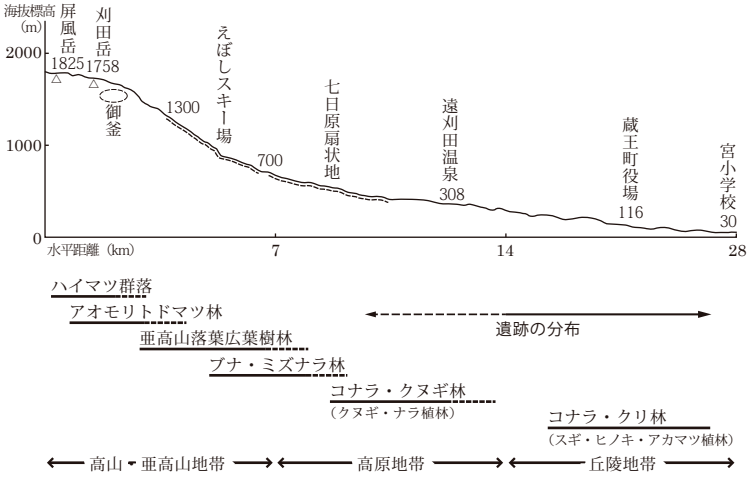
約 3.5 万年前に始まり、御釜－五色岳火山体を形成した。この活動は現在まで断続的に続いており、歴史時代の噴火記録は東北地方で最多である。山頂周辺では爆裂火口やカルデラ、各火山の噴出物からなる溶岩台地、山麓では火山泥流・火砕流の堆積物からなる火山扇状地などの火山地形が見られる。東方山麓では多数のテフラ層が確認され、最新期活動の中で最大規模の約 3 万年前の噴火の噴出物（註 3）は北東約 40km の仙台市街地周辺まで分布する。山頂周辺の溶岩台地では大規模な高層湿原が見られ、火山地形を開析する松川源流の澄川（すみかわ）・濁川（にごりがわ）は溶岩流末端で滝となって流下し深い峡谷を形成している。青麻火山は 30 ～ 40 万年前の活動で山体を形成した後、開析が進んでいる。

町域の東部を占める丘陵地帯は第三紀層を基盤とする。火山性堆積物に富んだ陸成・湖成層で、後述の円田盆地を中心として陥没構造が認められる（北村 1985）。丘陵地を広く覆う薄木層は火砕流堆積物と見られる軽石質凝灰岩を含み（註 4）、一部斜交葉理（クロスラミナ）が観察される。円田盆地西縁に分布する円田層は薄層理の発達した湖成層で、珪藻土を含む（註 5）。

こうした地形・地質の基底は中生代白亜紀の花崗岩類と、これを不整合に覆う第三紀中新世の凝灰岩類（グリーンタフ）である。奥羽脊梁山脈では花崗岩の一部が標高約 1,490m の名号峰山頂まで、凝灰岩類は標高約 1,000m 付近まで分布している（註 6）。

蔵王連峰と裾野の丘陵地を開析しながら東流する松川は、青麻山の東麓で流路を南へ向けて白石川に注ぐ。町域の東部に河岸段丘面を形成し、北東部では支流の藪川（やぶかわ）流域に円田盆地を擁する（第 3 図）。松川河岸段丘群は主に松川左岸で上位から遠刈田（とおがった）段丘面、永野段丘面、矢附段丘面に区分される。また、青麻山東麓では谷底の主面に曲竹段丘面が形成されている。円田盆地は東西 1.2km、南北 3.5km の底面を持ち、南を除く三方を丘陵が画する。盆地北側から西側にかけては高木丘陵、東側は愛宕山丘陵と通称されている。盆地内を蛇行しつつ南流する藪川は自然堤防が未発達で、流域に湿地帯を形成した。

気候　宮城県地方の気候は温帯湿潤気候に区分されるが、西部は奥羽脊梁山脈の、東部沿岸は海洋性気候の影響下にあり、地理的条件による変異が大きい。



第 4 図　蔵王町の模式断面と植生・遺跡の垂直分布

註 1. 蔵王国定公園・蔵王高原県立自然公園として自然保護区域が設定されている。

註 2. 日本の地質百選「蔵王火山」（日本の地質百選選定委員会・2007 年）。

註 3.「蔵王川崎スコリア」（板垣ほか 1981）と呼称され、宮城県南部における後期旧石器時代の鍵層となっている。

註 4. 薄木層中の軽石質凝灰岩は黒曜石を含む。蛍光 X 線分析によって「蔵王系黒曜石」と記載され、町内の縄文時代遺跡での利用が確認されている（佐々木 2009、杉原ほか 2011、鈴木・佐々木 2016）。

註 5. 明治時代末期から昭和 30 年頃にかけて盛んに採掘され、「円田珪藻土」として各地に出荷された（町史通史編）。

註 6. こうした基盤の隆起の上に形成された蔵王火山は「山の上の火山」、「底上げされた火山」などと表現されている。

松川中流域の景観

円田盆地の景観

円田盆地を流れる雁柄川（藪川支流）

県南地方の東部沿岸は福島県浜通り地方の気候と共通し、夏季は冷涼で冬季は緯度の割に温暖であるのに対して、蔵王町域を含む西部山沿いは福島県中通り地方の気候と共通し、より寒冷で積雪も多く、豪雪地帯に指定されている。

町域東部の丘陵地帯における平均気温は月別で 1.0℃（1 月）～ 24.3℃（8 月）、年間で 11.8℃である（註 7）。年間の降水量 1,190mm で冬季の積雪は少ない。隣接地域と比較して冬季でも温暖であり、これを反映して青麻山東麓の標高 150m 付近ではウラジロガシ林が見られる。高原地帯の平均気温は月別で -1.1℃（2 月）～ 23.4℃（8 月）、年間で 11.1℃である（註 8）。年間の降水量 1,624mm で夏季の雨量が多い。晩秋から早春にかけて北西の季節風が卓越し、強風による土壌の風食も見られる。高山地帯の平均気温は月別で -9.9℃（1 月）～ 15.9℃（8 月）、年間で 2.6℃である（註 9）。晩秋から早春にかけて常時強い西風が吹き、40m/s を超えることも珍しくない。こうした厳しい気象条件の下、山頂付近のアオモリトドマツ林では樹氷や霧氷が発達し、刈田岳南東斜面や北屏風岳の広大な北斜面などに一大樹氷原の形成を見る。

町域内の遺跡は大半が気候の穏やかな丘陵地帯に分布し、高原地帯には現在のところ数か所を数えるに過ぎない（第 3・4 図、註 10）。高原地帯に本格的な集落形成が見られるのは、遠刈田温泉地区での鉱山開発や温泉利用、七日原地区での牧場経営などが行なわれる近世以降のことと考えられる。

動植物相　町域東部の丘陵地帯を流れる松川・薮川流域に形成された沖積平野と段丘面、これに面した丘陵地は先史時代以降の主要な人間活動の場として利用されてきた。現在は平野部を中心に水田・畑などの農耕地が開け、丘陵部では畑・果樹園などの農耕地と山林がモザイク状に分布している。丘陵部の山林の多くはスギ・ヒノキ・アカマツの植林地となっているが、概ね 1960 年代まではコナラ・クリを主体とした落葉広葉樹林で占められていた（第 4 図）。これらは伐採による萌芽更新など人間の森林利用によって保たれてきた二次林である。蔵王山麓におけるこうした二次林の利用が窺われる事例は、考古学的にも確認されている（註 11）。

高原地帯では東部にコナラを主体とした二次林が広がり、近世～近代にかけて多くの木地集落を擁した（註 12）。また薪炭の生産も盛んであったが、これらの伐採が進んだ後は卓越風の影響によって植生の回復を見ず（註 13）、現在はクヌギ・ナラ・スギ・カラマツなどの植林が試行されている。西部の烏帽子岳中腹にかけては冷温帯落葉広葉樹林の山地帯で、広大なブナ・ミズナラ林が形成されている。ミズナラ林は比較的新期の蔵王山の噴火によってブナ林が破壊された後に再生した二次林と考えられている。

亜高山帯では常緑針葉樹林のアオモリトドマツ林が広大な森林を形成している。屏風岳東面の断崖には亜高山落葉広葉低木林が分布する。さらに高度を増した高山帯では高木の生育は見られず、ハイマツ低木林が分布する。火山荒原となる山頂付近ではガンコウラン・イワカガミなどの高山植物がカーペット状の群落を形成し、砂礫地にはコマクサも見られる。

こうした植物相を背景として、町域内には大型獣のニホンツキノワグマ・ニ

註 7. 曲竹地区（現蔵王高校・標高 100m 地点）における 1965 ～ 1972 年の記録（町史通史編所収）による。

註 8. 遠刈田温泉地区（遠刈田小学校・標高 310m 地点）における 1966 ～ 1969 年の記録（町史通史編所収）による。

註 9. 遠刈田温泉地区と山形県蔵王温泉地区の実測値を基にした蔵王山頂（標高 1840m）の計算値（町史通史編所収）。

註 10. 南に隣接する白石市域では、不忘山東麓から青麻山南麓にかけての標高 700m 付近まで多数の遺跡が分布する。把握されている遺跡の時期は縄文時代早期が多いようである。

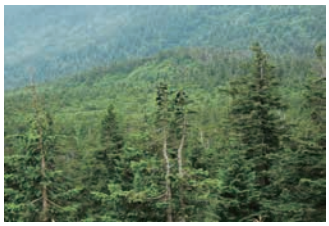
註 11. 七ヶ宿町小梁川遺跡（縄文時代中期）ではフラスコ状土坑の多くで底面直上に炭化物集積層が確認され、352 号土坑では多量のトチの種子が含まれていた（宮城県教育委員会ほか 1987）。蔵王町十郎田遺跡（13 世紀）では SE66 井戸跡から挽物未成品 180 点が出土し、用材は全てケヤキであった（町 14 集）。

註 12. 遠刈田新地（蔵王町）、青根（川崎町）、弥治郎（白石市）、横川（七ヶ宿町）、蔵王温泉高湯（山形市）など。

註 13. 卓越風の影響を強く受ける七日原扇状地は近世においても原野であり、1743 年に七日原牧場が拓かれたが厳しい環境下での経営は困難を極めた（「片倉代々記」など・町史資料編Ⅱ所収）。牧場経営は近代まで続いたが振るわず、明治後期にはスギ・クヌギなどの植林事業に転じた（町史通史編）。戦後は引揚者の入植などによって開拓が進み、現在は牧草地や畑としての利用が多い。

ホンカモシカ、中小型獣のホンドタヌキ・ホンドギツネ・トウホクノウサギ・ホンドリス・ホンドイタチ・オコジョ・ムササビ・ネズミ類・モグラ・ヤマネ・コウモリ類などの哺乳動物をはじめとする多様な動物が生息している。

陸水域においては、松川・薮川流域でイワナ・ニジマス・ヤマメ・カジカ・アブラハヤ・コイ・フナ・ドジョウ・ウナギ・ナマズ・ニゴイ・サケなど多様な魚類の生息が見られる。ただし強酸性湖の御釜とその浸透水を源流とする濁川では魚類の生息がほとんど見られない。蔵王火山の活動が活発化するたび、濁川から松川と下流の白石川に大量の酸性水が流入して流域の魚類が死滅したり農耕地に被害を与えることがあった。


アオモリトドマツ林

馬の背カルデラと御釜火口

第２節　歴史的環境

刈田地方の歴史　蔵王連峰の東麓に位置する刈田地方（註 14）の地形が造り出す景観について、「刈田郡誌」では「郡下到るところ連丘連山起伏し、谿谷渓流を見る。この一圓の水を聚めて阿武隈川に運ぶもの即ち水清く、石白き白石川にして、其本流支流に沿って、管内各村を往訪すべき諸道開けたり…」と記している（刈田郡教育会 1928）。蔵王連峰に連なる広大な山地・丘陵と、これを隈なく開析する大小の河川は多種多様な動植物を育み、先史時代には人類の豊かな生活基盤となっていたことが濃密な遺跡分布から窺える。歴史時代には軍事上の要衝として数多くの城館が構築され、しばしば戦乱の舞台ともなった。一方で農耕地が狭小である上に低地は洪水の常襲地帯で、時折集落や田畑の流失もあり、交通の難所でもあった。また、蔵王山の噴火による降灰や泥流被害の記録も数多く残されている。

註 14．現在の行政区分では宮城県南西部の刈田郡蔵王町・七ヶ宿町、白石市にあたる。

刈田郡に関する最古の記録は、「続日本紀」に記された養老５年（721 年）の陸奥国苅田郡建置に関する記事である。これによると苅田郡は柴田郡のうち二郷を分割して設置され、仙南地方では最も遅い建郡であった。陸奥国は７世紀半ばに亘理・伊具地方を北辺として成立し、７世紀後半頃には大崎平野周辺までその範囲を広げたと考えられている。このため、柴田・刈田郡周辺は陸奥国成立後の早い段階で律令政府の安定した統治下に置かれたであろう。

平安時代末期には奥州藤原氏の支配下にあったとみられ、丈六阿弥陀如来坐像を安置する阿弥陀堂が建立された（註 15）。また、奥州合戦について「吾妻鏡」の伝えるところでは、文治５年（1189 年）に藤原泰衡軍は刈田郡根無藤（蔵王町円田）に城郭を構え、四方坂（同平沢）との間で源頼朝軍と進退七度に及ぶ戦いの末に敗退したという。このことから、当時この地域が軍事上重要視されており、近世の笹谷街道の一部となる根無藤から四方坂を経る道筋が、既に出羽国へ至る出羽道の一部として機能していたことが窺える。

註 15．阿弥陀堂の創建時に植えられたと伝わる参道杉並木の１本が平沢字丈六地内に現存する（県指定天然記念物「平沢弥陀の杉附戒石銘」）。丈六阿弥陀如来坐像は地区内の保昌寺に現存する（県指定文化財）。

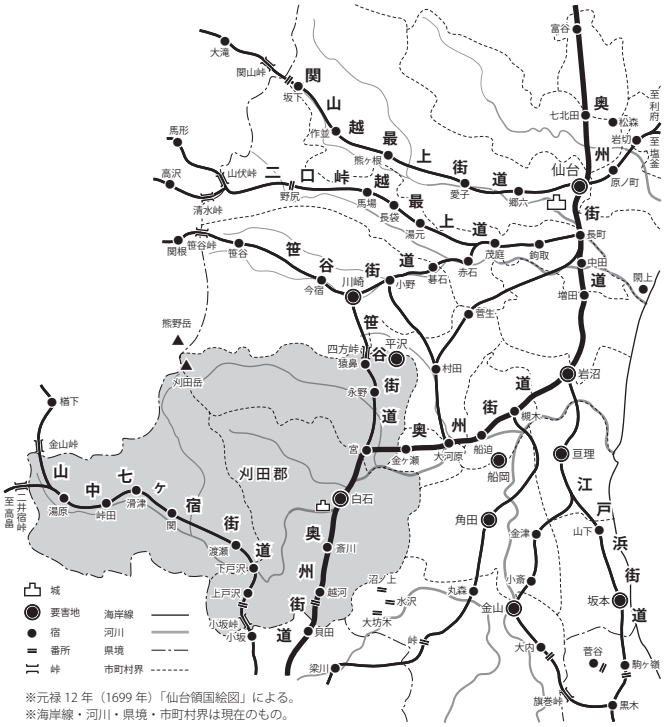
平沢弥陀の杉

丈六阿弥陀如来坐像

鎌倉時代以降は白石氏（刈田氏）が刈田郡の中心勢力であった。白石氏は南隣の伊達郡を本拠とする伊達氏との関係が深く、戦国時代には伊達氏の傘下に組み込まれた。天正 18 年（1590 年）に豊臣秀吉による奥州仕置で刈田郡は伊達領と確定されたものの、翌年の再仕置で伊達政宗が岩出山城へ移封され、

刈田郡は長井・信夫・伊達などの各郡とともに会津黒川城に入封した蒲生氏郷に与えられた。慶長 3 年（1598 年）には蒲生氏に代わって会津に入封した上杉景勝の領地となり、家臣甘粕備後景継が白石城主となったが、政宗は慶長 5 年（1600 年）に徳川家康の意を受けて上杉氏を押さえるため白石城を攻めて奪還し、刈田郡は仙台藩領となった。政宗は慶長 7 年（1602 年）に重臣・片倉景綱を白石城主とし、藩境西南の固めを任せた。以後は代々片倉氏が白石城主を務め、江戸時代を通じて刈田郡の過半は片倉氏の知行地であった。

江戸時代には奥羽山脈を挟んで陸奥国を奥州街道、出羽国を羽州街道が縦貫しており、刈田郡内にも奥州街道が白石城下を通過していた。また、奥州街道の宮宿（蔵王町宮）から分岐して永野宿・猿鼻宿・四方峠（同円田）を経由し、笹谷峠を越えて山形の羽州街道へ抜ける笹谷街道も設けられていた（第 5 図）。



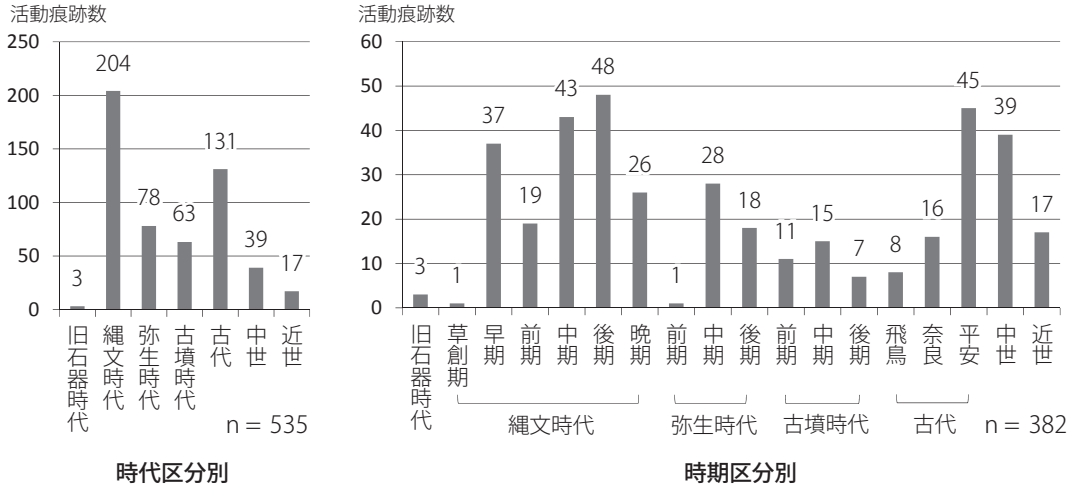
第 5 図　刈田郡周辺の街道（風間 1983 原図）

笹谷街道の古道（四方峠付近）

遺跡の概況　町域内における周知の遺跡は現在 203 か所を数える。その多くは町域東部の平野・丘陵地帯に分布し、①青麻山東麓の丘陵と段丘上、②松川北岸の段丘と支流の高木川流域の丘陵上、③円田盆地に接する丘陵上に集中域を形成する。なお、町域西部の高原地帯では七日原扇状地の扇端部に少数の遺跡が分布する。これらの遺跡のほとんどは、複数の時代や時期区分に比定される活動痕跡が重複する複合遺跡であるが、時代や時期ごとの分布には一定の傾向が認められ、主に生業形態の変化を反映している。

註 16. 宮城県遺跡地名表によれば明神裏遺跡で「細石器」、乙当地遺跡で「旧石器」の記載があるが詳細は不明である。

各遺跡に残された活動痕跡を時期区分別に集計するとその総数は延べ 535 か所を数え、時代・時期ごとの人間活動の動態を窺い知ることができる（第 6 図）。



※各時代・時期区分の時間幅は均等ではない。また、時期区分が不明な活動痕跡があるため、時代別の合計と時期区分別の合計は一致しない。

第 6 図　蔵王町域の遺跡における活動痕跡の動態

各時代・時期区分の時間幅は均等でないため単純な比較は出来ないものの、ある程度考慮しながら見ていくと後期旧石器時代・縄文時代草創期を低調期、縄文時代早期・中期、弥生時代中期を増加期、縄文時代前期・晩期を減少期と位置付けることが可能である。弥生時代後期以降の活動は比較的安定的に推移したように見えるが、仔細に見ると古墳時代後期前半、平安時代後半の低調期、平安時代前半、中世前半の増加期を含んでいる。このように、町域内の人間活動の動態は幾度かの消長を繰り返してきたことが知られ、それぞれ当時の当地域における社会状況を反映したものと考えられる。以下、各時代・時期ごとに主要な遺跡の活動痕跡について概観する。

旧石器時代　松川右岸の段丘上に持長地（もっちょうじ）遺跡など３か所の活動痕跡が認められる。いずれも単独出土・採集資料のため、帰属時期や活動の内容には不明な点が多い（註 16）。持長地遺跡では黄褐色ローム漸移層下部からナイフ形石器１点が単独出土している（宮城県教育委員会ほか 1980）。珪質頁岩製の石刃を素材として両側縁下部にブランティングを施す基部加工ナイフ形石器である。また、鉄砲町遺跡では珪質頁岩製の石刃を素材とする彫刻刀形石器１点などが採集されている（註 17）。近隣では村田町の新川流域を中心とする玉髄原産地に後期旧石器時代の遺跡が点在し、原産地遺跡群を形成している（新川流域遺跡群・大場 2004）。名取市の高舘丘陵東部に立地する野田山遺跡では、珪質頁岩製の石刃石器群が出土している（名取市教育委員会ほか 2002）。

縄文時代　青麻山東麓から松川左岸にかけての段丘・丘陵上などに延べ 204 か所の活動痕跡が認められ、各時期の集落立地の傾向に違いが見られる。

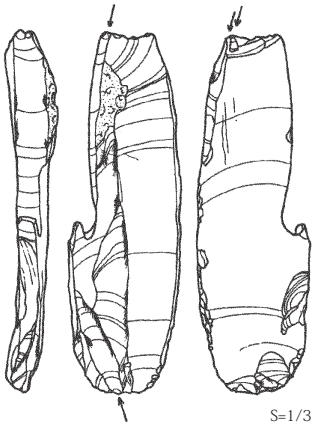
草創期は明確な活動痕跡に乏しいが、円田盆地の前戸内遺跡で珪質頁岩製の槍先形尖頭器１点が採集されている（註 18）。近隣では白石市高野遺跡で槍先形尖頭器、小菅遺跡・戸谷沢遺跡で局部磨製石斧が採集されている（白石市史編纂委員会 1976・1979）。

早期は青麻山東麓に沢入Ｄ遺跡、松川右岸に明神裏遺跡・上原田遺跡、左岸に手代木遺跡・三本槻Ａ遺跡、円田盆地に磯ヶ坂遺跡、七日原扇状地に北原尾遺跡などがあり、比較的小規模とみられる活動痕跡が広範囲に点在する。明神裏遺跡は明神裏Ⅲ式（林 1962）の標識遺跡である。近隣では白石市の不忘山東麓から青麻山南麓にかけて比較的多数の遺跡が点在する。

前期は松川右岸に上原田遺跡・長峰遺跡、左岸に西浦遺跡・上曲木Ｂ遺跡、七日原扇状地に七日原遺跡などがあり、青麻山東麓から松川左岸にかけての段丘上に多く分布する。

中期は松川右岸に上原田遺跡・二屋敷遺跡、左岸に谷地遺跡・寺門前遺跡・高木遺跡・鞘堂山遺跡・湯坂山Ｂ遺跡などがある。多くの遺跡が立地する松川左岸の段丘面は三段に区別されており、上位の遠刈田段丘面に湯坂山Ｂ遺跡、中位の永野段丘面に高木遺跡・鞘堂山遺跡、低位の矢附段丘面に谷地遺跡と寺門前遺跡が立地する（註 19）。谷地遺跡では中期前半（大木 7b・8a 式期）の住居跡 14 軒、貯蔵穴 55 基、遺物包含層などを確認している。土偶や硬玉製垂飾品などを含む大量の遺物が出土している（町 20 集）。鞘堂山遺跡では中期

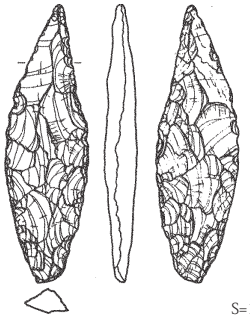
註 17.「鉄砲町遺跡出土」とされるのみで発見の経緯や地点は不明であったが（町史資料編Ⅰ）、三日月形尖頭器・石刃各１点（いずれも所在不明）とともに青麻山東麓の「吾戸囲」の低平な残丘上で 1961 年頃の土取り工事の際に発見されたものと判明した（相原 2016）。現在この地名は残されていないものの、「我戸（わがあがと）橋」の存在から現在の宮字沢田地内に比定される。詳細な地点が不明なため、宮城県遺跡地名表には記載されていない。



S=1/3

彫刻刀形石器（鉄砲町遺跡）

註 18. 遺跡の西側から南面を流れる沢で採集されたものとされ、石器が本来包含されていた地点は不明である（町史資料編Ⅰ）。また、青麻山東麓の下別当遺跡で採集された大形の槍先形尖頭器１点も当該期の可能性がある（町史資料編Ⅰ）。このほか、「明神裏遺跡採集」とされた槍先形尖頭器１点（白石市教育委員会 1968）は、その後「出土地不明（白石市周辺）」とされている（白石市史編纂委員会 1976・1979、蔵王町史資料編Ⅰ）。



S=1/3

槍先形尖頭器（前戸内遺跡）

中葉（大木 8a・8b 式期）の住居跡 5 軒、貯蔵穴 31 基などを確認している。住居は貯蔵穴・柱穴群を囲むように配置されていた可能性がある。湯坂山 B 遺跡では中期後葉（大木 9・10 式期）の住居跡 23 軒、貯蔵穴 13 基などを確認している。住居の多くは複式炉を伴い、土笛などを含む多量の遺物が出土している。二屋敷遺跡では中期末葉（大木 10 式期）の住居跡 5 軒などを確認している（宮城県教育委員会 1984）。

後期は青麻山東麓に山田沢遺跡、松川右岸に二屋敷遺跡、松川左岸の西浦 B 遺跡などがあり、青麻山東麓から松川両岸の段丘面に多く分布する。二屋敷遺跡では後期初頭～前葉（綱取Ⅱ式期）の炉跡 10 基、土器埋設遺構、配石・立石遺構、捨て場遺構などが確認されている（宮城県教育委員会 1984）。西浦 B 遺跡でもほぼ同時期の住居跡 1 軒、建物跡 23 棟、貯蔵穴 30 基などを確認している。遺構群は中央部の空白域を囲むように緩やかな環状に配置される。三十稲場式、門前式など異系統土器が散見され、新潟県板山産と判別された黒曜石製石鏃 1 点が出土している（町 10 集）。

晩期は青麻山東麓に下別当遺跡・願行寺遺跡・鍛冶沢遺跡などがあり、青麻山東麓の沢地形に面した段丘上に多く分布する。鍛冶沢遺跡では後期末～晩期末にかけての土坑墓・土器埋設遺構・建物跡・住居跡などの遺構群が確認され、建物群は広場を囲むように弧状に配置されていた（宮城県教育委員会 2010）。また、鍛冶沢遺跡で中空土偶（仙台市博物館蔵）、願行寺遺跡で屈折土偶（町指定文化財）が採集されている。

弥生時代　78 か所の活動痕跡が丘陵地帯の広範囲に点在する。前期は明確な活動痕跡に乏しいが、青麻山東麓の鍛冶沢遺跡では、縄文時代晩期から継続する墓域で再葬墓が確認されている（宮城県教育委員会 2010）。中期は松川左岸の西浦遺跡、円田盆地の大橋遺跡・立目場遺跡・都遺跡などがある。この時期になると、松川左岸から円田盆地にかけての丘陵・段丘・微高地上に多く分布するようになり、遺跡分布上の大きな画期となっている。西浦遺跡は円田式（伊東 1955）の標識遺跡である。都遺跡では籾殻圧痕のある土器片が出土している（町 3 集）。後期は円田盆地の愛宕山遺跡・天王遺跡・赤鬼上遺跡・磯ヶ坂遺跡などがあり、円田盆地の丘陵・微高地上に多く分布する。

古墳時代　63 か所の活動痕跡が認められる。多くは円田盆地の丘陵・微高地上に集中しており、一部が松川・白石川の合流点付近の丘陵上に分布する。前期は大橋遺跡・堀の内遺跡などの集落が円田盆地の丘陵上に立地する。中期の集落は中沢 A 遺跡・台遺跡など円田盆地の丘陵上に立地するものと、都遺跡・窪田遺跡のように盆地底面の微高地上に立地するものがある。町内の古墳の多くはこの時期に属し、円田盆地の丘陵上に夕向原古墳群・古峯神社古墳・宋膳堂古墳など、青麻山東麓の松川・白石川の合流点付近の低丘陵上に明神裏古墳がある。後期の明確な活動痕跡は未確認であるが、円田盆地北西部の丘陵上に立地する諏訪舘横穴墓群（註 20）は古墳時代後期～奈良時代と見られる。

古代　131 か所の活動痕跡が認められる。その分布は円田盆地の丘陵・微高地上に集中し、青麻山東麓から松川左岸にかけての丘陵・段丘・微高地上の広

註 19.　寺門前遺跡では平成 23 年度の遺構確認調査で中期前葉（大木 7b・8a 式期）の遺構群を確認している（町 18 集）。県道を挟んで隣接する谷地遺跡と一体の遺跡と考えられる。

縄文土器（谷地遺跡・縄文時代中期）

縄文土器（鞘堂山遺跡・縄文時代中期）

竪穴住居跡（湯坂山B遺跡・縄文時代中期）

掘立柱建物跡群（鍛冶沢遺跡・縄文時代晩期）

長頸壺（西浦遺跡・弥生時代中期）

註 20.　現在は横穴の所在を確認できないが、遺跡調査カードによれば横穴は「一列，十数基」であり、「須恵器，人骨」の出土が記載されている。

範囲には比較的小規模とみられる活動痕跡が点在する。飛鳥時代は塩沢北遺跡・十郎田遺跡など、奈良時代は堀の内遺跡・六角遺跡・都遺跡などが円田盆地の丘陵・微高地上に立地する。微高地上に立地し材木塀・大溝による区画施設を伴う十郎田遺跡は囲郭集落で、都遺跡は寺院または官衙の可能性がある（町３・13・19 集）。平安時代は円田盆地に前戸内遺跡・東山遺跡など、青麻山東麓に青竹遺跡・観音堂山遺跡などがあり、丘陵地帯の広範囲に点在する。前戸内遺跡では、住居跡 14 軒、建物跡 21 棟などを確認している。集落内には建物跡が逆Ｌ字形に配置される一角があり、豪族居宅と考えられる（町 16 集）。

中世　39 か所の活動痕跡が認められる。このうち 15 か所は城館跡で、青麻山東麓から円田盆地西縁にかけての丘陵上に点在する。また、城館跡の周辺を中心に段丘・微高地上で屋敷跡が確認されている。城館跡は、青麻山東麓に宮城館跡・山家館跡・館の山城跡など、円田盆地に矢附館跡・兵衛館跡・西小屋館跡などがある。兵衛館跡は円田盆地最奥部にあり、丘陵頂部の平場を画する土塁・空堀が良好に残存する。西小屋館跡は円田盆地北部の微高地上にあり、土塁と水堀を伴う方形館である。また、持長地遺跡は山家館跡、西屋敷遺跡は西小屋館跡に隣接し、武士階級とみられる屋敷跡が確認されている（宮城県教育委員会 1980・町 15 集）。

近世　17 か所の活動痕跡が確認されている。円田盆地の平沢館跡は主要部の遺構が現存しないが、「平沢要害屋敷絵図」には本丸・二の丸・水堀と、南側に屈折する大手が見え、小規模ながらも近世城郭的な構造が窺える。車地蔵遺跡などでは武士階級の屋敷跡、六角遺跡・磯ヶ坂遺跡・前戸内遺跡などでは庶民階級の墓地を確認している。遠刈田地区の松川左岸には岩崎山金山跡がある。現存する近世の建造物としては、青麻山東麓の我妻家住宅（江戸中期、国指定文化財）、奥平家住宅（江戸後期、町指定文化財）、刈田嶺神社本殿（江戸中期、県指定文化財）、日吉神社本殿（江戸中期）がある。刈田嶺神社は刈田郡総鎮守、白石城主片倉氏の総守護神である。奥州街道の宮宿から分岐して出羽へ至る笹谷街道は町東部を南北に通過し、永野宿、猿鼻宿が置かれた。宮－永野宿間に曲竹一里塚（町史跡）が現存し、円田盆地西側の四方峠付近には古道の一部が保存され往時の景観を偲ばせている。

宋膳堂古墳（古墳時代中期）

中沢Ａ遺跡出土土器（古墳時代中期）

竪穴住居跡（六角遺跡・奈良時代前半）

六角遺跡出土土器（奈良時代前半）

土塁と通路遺構（兵衛館跡・中世）

第３節　指定文化財等

１．指定文化財

国指定文化財

特別天然記念物　カモシカ（南奥羽山系カモシカ保護地域）

建　造　物　我妻家住宅主屋・文庫蔵・前蔵・板蔵
附 穀蔵・表門・宅地・萬年記

県指定文化財

建　造　物　刈田嶺神社本殿

美術工芸品　丈六阿弥陀如来坐像（保昌寺）

我妻家住宅 主屋（江戸時代中期）

天然記念物　平沢弥陀の杉　附 戒石銘

町指定文化財

建　造　物　刈田嶺神社拝殿・随身門　　奥平家住宅

美術工芸品　刀剣　太刀（刈田嶺神社）

工芸品　三尊堂舎（清立寺）

古文書　高野家文書（261 冊）

考古資料　願行寺遺跡出土土偶

歴史資料　高野倫兼遺訓碑

小野訓導映画フィルム　附 デジタル映像記録媒体

無形民俗文化財　民俗芸能　八雲神社神楽　　榊流東根神楽

小村崎榊流法印神楽　平沢榊流神楽

白山神社神楽　　刈田嶺神社神楽

小村崎春駒　　小村崎田植踊

有形民俗文化財　信　　仰　白鳥古碑群（5 基）　刈田嶺神社絵馬（21 点）

敬明講図（絵馬）　　だるま講石造物群（3 基）

史　　跡　白九頭龍古墳　　岩崎山金窟址

遠刈田製鉄所高炉跡　　曲竹一里塚　附 古碑群

安養寺参道跡保存地区（だるま塚　附 古碑群）

2．指定保存樹木

町指定保存樹木

大庄屋のケヤキ　　水神龍桜　　神子屋敷のコブシ

臼久保のサイカチ　　平沢小学校校庭の松　　宮小学校のスズカケ

定谷口のイチョウ　　鬼子坂の桜　　平沢小学校のしだれ桜

旧墓所のマユミ　　館山公園のヒイラギ　　狐塚のサイカチ

熊野神社のイチョウ　エコーラインのミズナラ　白山神社の杉並木

えぼし千年杉

3．自然保護区域

蔵王国定公園

地　　域　宮城県仙台市・白石市・蔵王町・七ヶ宿町・川崎町

山形県山形市・上山市

面　　積　39,635ha（うち蔵王町分 5,010ha）

創 立 日　昭和 38 年（1963 年）8 月 8 日

蔵王高原県立自然公園

地　　域　宮城県白石市・蔵王町・七ヶ宿町・川崎町

面　　積　20,606ha（うち蔵王町分 4,283ha）

創 立 日　昭和 22 年（1947 年）2 月 21 日

刈田嶺神社 随身門（江戸時代後期）

三尊堂舎（江戸時代中期）

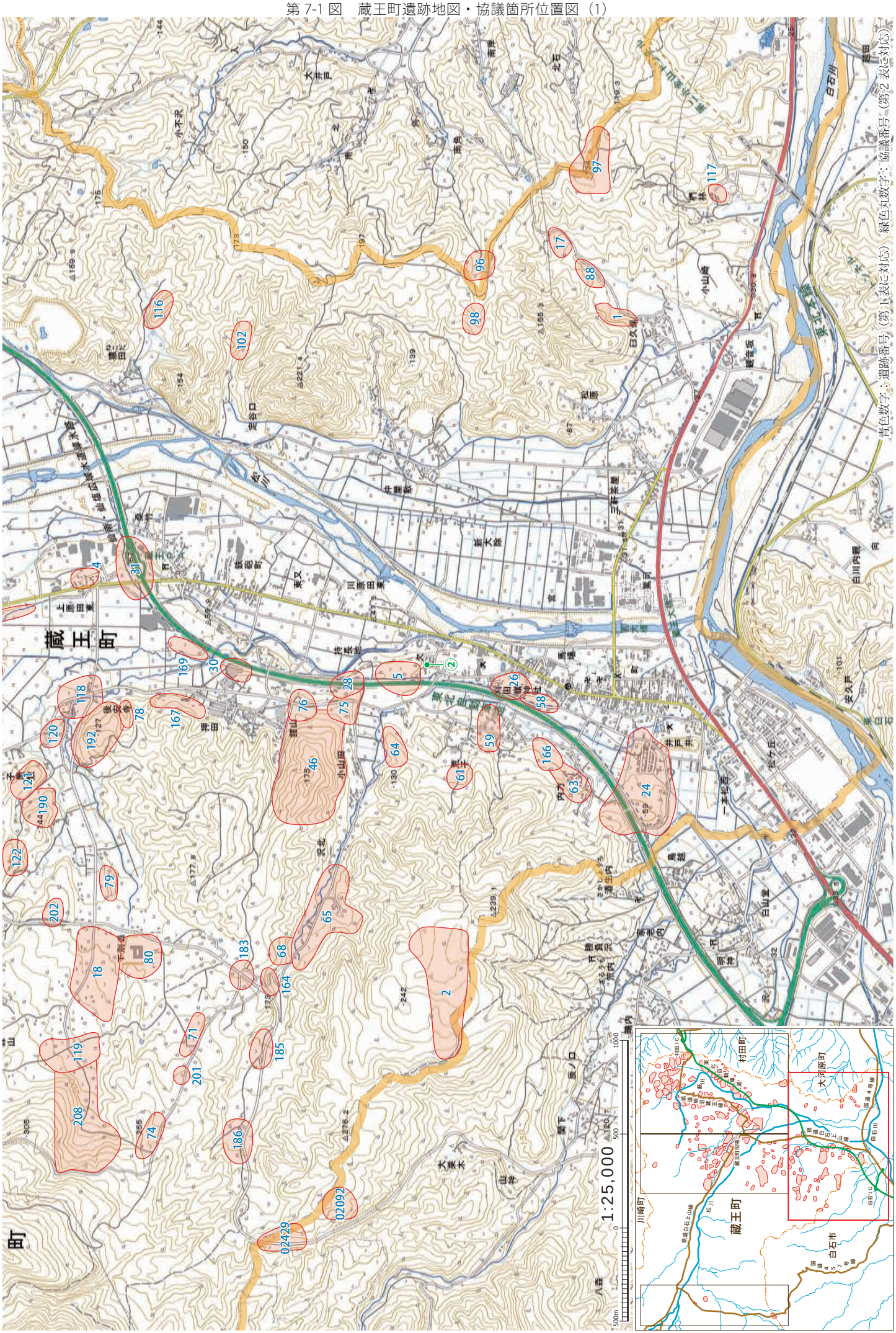
願行寺遺跡出土土偶（縄文時代晩期）

白九頭竜古墳（古墳時代）

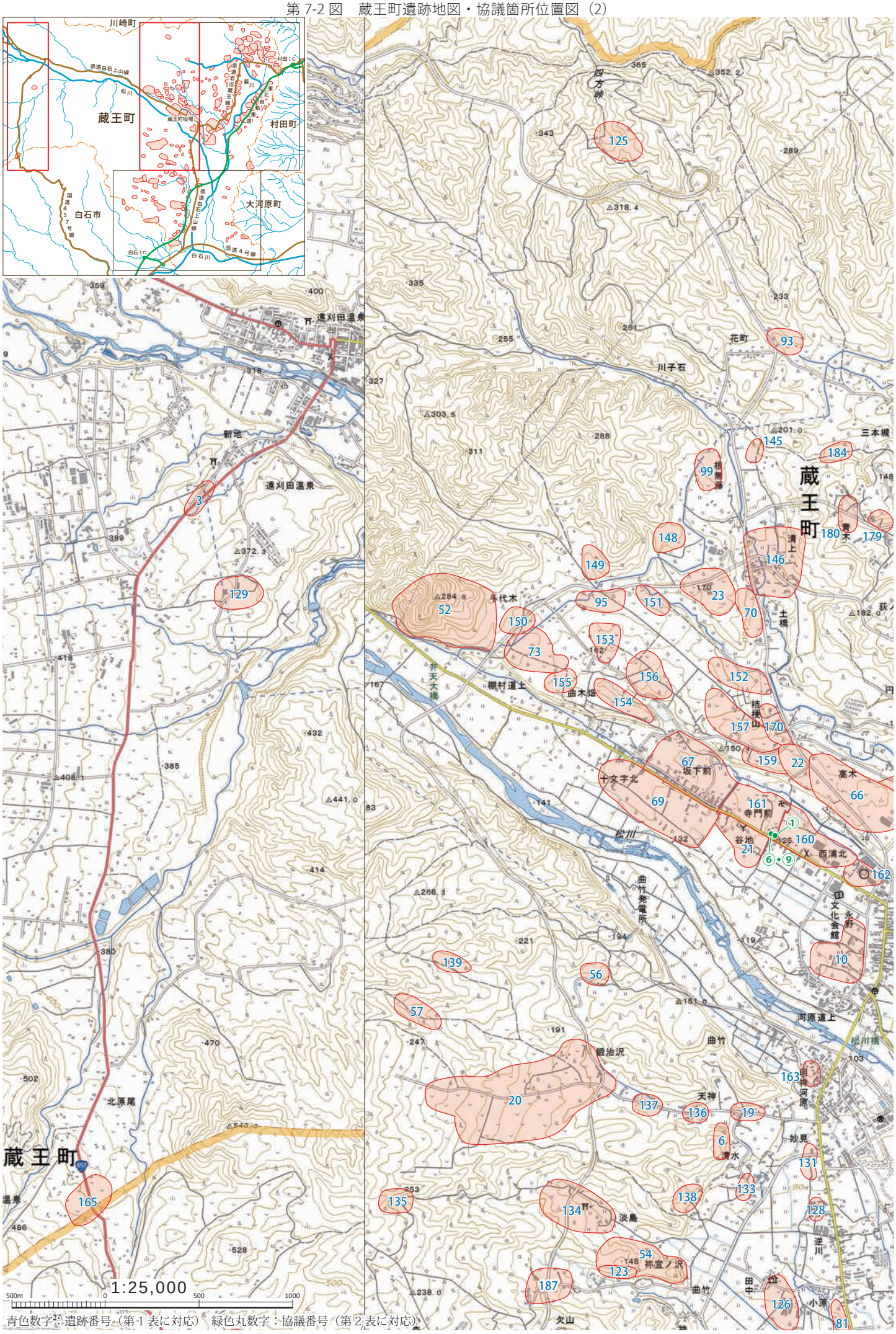
岩崎山金窟址（江戸時代前期）

狐塚のサイカチ

第 7-1 図　蔵王町遺跡地図・協議箇所位置図（1）

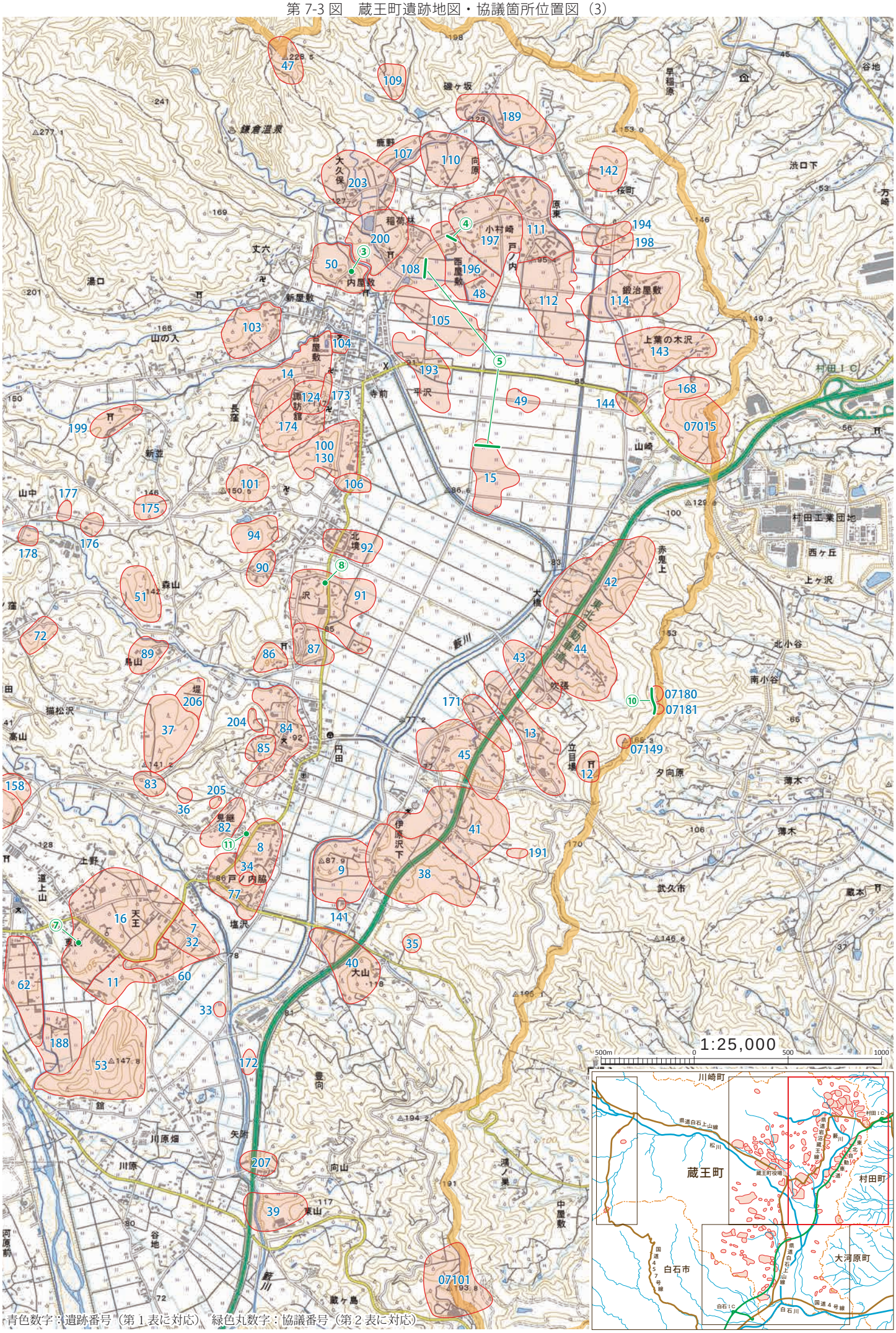


第 7-2 図　蔵王町遺跡地図・協議箇所位置図（2）



青色数字：遺跡番号（第 1 表に対応）　緑色丸数字：協議番号（第 2 表に対応）

第 7-3 図　蔵王町遺跡地図・協議箇所位置図（3）



第 1-1 表　蔵王町内遺跡一覧

番号	遺跡名	種別	時代
1	向上遺跡	散布地・横穴墓	古墳、古代
2	上平遺跡	散布地	縄文、古代
3	新地遺跡	散布地	古代
4	上原田遺跡	散布地	縄文早～後、古墳、古代
5	**長峰遺跡**	散布地	縄文前・中、弥生中、古代
6	清水遺跡	散布地	縄文・弥生中
7	天王遺跡	散布地	縄文早・中、弥生中・後、古代
8	**宋膳堂遺跡**	散布地	弥生中・後、古墳、平安
9	台遺跡	集落・散布地・水田	弥生中、古墳中・後、平安、中世・近世
10	西浦遺跡	集落・散布地	縄文早～後、弥生、古代
11	下永向山遺跡	散布地	縄文中、弥生中・後、古代
12	愛宕山遺跡	集落・散布地	弥生中・後、古墳前・中
13	立目場遺跡	集落・散布地	縄文、弥生中・後、古墳
14	諏訪舘前遺跡	集落・散布地	縄文晩、弥生、古墳前・中、平安
15	**都遺跡**	集落・散布地	縄文後、弥生中・後、古墳前～後、飛鳥～平安、中世
16	**上野遺跡**	散布地	縄文中、弥生中、平安
17	臼ヶ久保入遺跡	散布地	縄文前・中、古代
18	下別当遺跡	散布地	縄文中～晩
19	日向前遺跡	散布地	縄文早・晩、古代
20	鍛冶沢遺跡	集落・散布地	縄文早・中～晩、弥生前・中、古代
21	谷地遺跡	集落・散布地	縄文中～晩
22	鞘堂山遺跡	集落・散布地	縄文中・後、弥生、古代
23	湯坂山Ｂ遺跡	集落・散布地	縄文中～晩、弥生
24	宮城館跡	城館・散布地	古墳中、中世
26	明神裏遺跡	散布地・古墳	旧石器、縄文早・前、弥生中、古墳中、平安
27	西裏遺跡	散布地	縄文中、弥生中
28	持長地遺跡	集落・散布地	旧石器、縄文前～後、弥生、古墳、古代、中世
30	二屋敷遺跡	集落・散布地	縄文早・中～晩、平安、中世
31	下原田遺跡	集落・散布地	縄文前～晩、弥生後、平安
32	天王古墳群	円墳	古墳
33	鉾附神社古墳	円墳	古墳
34	宋膳堂古墳	円墳	古墳
35	中屋敷古墳	円墳	古墳
36	八幡山古墳群	円墳・方墳	古墳
37	花楯館跡	城館	中世
38	塩沢北遺跡	集落・散布地	弥生中・後、古墳中・後、飛鳥、平安
39	東山遺跡	集落・散布地	縄文早、平安
40	大山遺跡	集落・散布地	縄文早、弥生中、古墳前
41	伊原沢下遺跡	集落・散布地	古墳
42	赤鬼上遺跡	集落・散布地	弥生中・後、平安、中世
43	屋木戸内遺跡	散布地	弥生中、古代
44	大橋遺跡	集落・散布地	縄文後、弥生中・後、古墳前、平安
45	中沢Ａ遺跡	集落・散布地	縄文早、弥生中・後、古墳中・後、古代～中世
46	山家館跡	城館	中世
47	兵衛館跡	城館・散布地	縄文、弥生、古代、中世
48	西小屋館跡	城館・散布地	平安、中世
49	新城館跡	城館・散布地	弥生、古墳後～古代、中世
50	**平沢館跡**	城館	中世
51	築館館跡	城館	中世
52	棚村館跡	城館	中世
53	矢附館跡	城館	中世
54	曲竹小屋館跡	城館	中世
56	馬越遺跡	散布地	縄文中
57	鍛冶沢北遺跡	散布地	縄文早・中～晩、古代
58	馬場北遺跡	散布地	縄文早、平安
59	乙当地遺跡	散布地	旧石器、縄文早、平安
60	蟹沢遺跡	散布地	弥生中
61	荒子遺跡	散布地	古代
62	東浦遺跡	散布地	縄文中・後、弥生中、古墳、古代
63	内方遺跡	散布地	古代
64	小山田遺跡	散布地	縄文、古代、中世
65	山田沢遺跡	散布地	縄文後・晩
66	高木遺跡	散布地	縄文中
67	曲木遺跡	散布地	縄文中
68	沢北遺跡	散布地	縄文後・晩、弥生中
69	十文字遺跡	散布地	縄文中
70	湯坂山遺跡	散布地	縄文中～晩
71	沢入遺跡	散布地	縄文早・中・後、古代
72	荻の窪遺跡	散布地	縄文晩、弥生
73	棚村遺跡	散布地	縄文後
74	遠森山下遺跡	散布地	縄文晩、古代
75	八幡平遺跡	散布地	縄文前・中、古代
76	根方Ａ遺跡	散布地	縄文後
77	戸の内脇遺跡	散布地	縄文早・中、弥生中、古墳、平安、中世
78	中野Ａ遺跡	散布地	縄文後、古代
79	下別当下遺跡	散布地	縄文後
80	小屋場遺跡	散布地	縄文後・晩
81	逆川遺跡	散布地	縄文早・前
82	土ヶ市遺跡	散布地	弥生、古代
83	見継遺跡	散布地	縄文
84	堀の内遺跡	集落・散布地	縄文、弥生中・後、古墳前～後、奈良、平安
85	寺坂遺跡	散布地	平安
86	清水上遺跡	散布地	弥生、平安
87	白山遺跡	集落・散布地	弥生、古墳中
88	松ヶ沢遺跡	散布地	縄文後、古代
89	鳥山遺跡	散布地	縄文中、古代
90	沢遺跡	散布地	古代
91	**本宿前遺跡**	集落・散布地	縄文早、弥生中、平安、中世
92	中組遺跡	集落・散布地	縄文早・中、弥生、平安、中世、近世
93	町尻遺跡	散布地	縄文
94	北境遺跡	散布地	縄文早、弥生後、古代
95	手代木遺跡	散布地	縄文早、弥生
96	東久保遺跡	散布地	古代
97	大久保遺跡	散布地	縄文中・後
98	大平山遺跡	散布地	縄文
99	根無藤館跡	城館	中世
100	小高遺跡	散布地	縄文、弥生、古代
101	大柿内遺跡	散布地	弥生
102	定谷口遺跡	散布地	縄文後、古代
103	丈六遺跡	散布地	古代
104	平沢遺跡	散布地	古代
105	十郎田遺跡	集落・散布地	縄文、古墳中～後、飛鳥～平安、中世、近世
106	堂の入遺跡	散布地	弥生、古代、中世

第 1-2 表　蔵王町内遺跡一覧

番号	遺跡名	種別	時代
107	大久保東遺跡	散布地	古墳、奈良、平安
108	**前戸内遺跡**	集落・墓地・散布地	旧石器、縄文後、弥生中・後、古墳中、奈良、平安、中世、近世
109	鹿野遺跡	散布地	古代
110	後原遺跡	散布地	縄文、古墳、奈良、平安
111	原遺跡	集落・散布地	古代
112	六角遺跡	集落・墓地・散布地	縄文早、弥生中・後、古墳前・後、奈良、平安、中世、近世
114	鍛冶屋敷遺跡	集落・散布地	縄文中～晩、古代、近世
116	一本木遺跡	散布地	縄文中・後
117	椚林遺跡	散布地	古代
118	青竹遺跡	集落・散布地	縄文後、弥生後、平安、中世、近世
119	願行寺遺跡	散布地・寺院	縄文早・中・後、弥生中、古墳、中世
120	後安寺遺跡	散布地	古代
121	若神子山遺跡	散布地	縄文後
122	足の又遺跡	散布地	縄文晩
123	称宜ノ沢遺跡	散布地	縄文後
124	諏訪館跡	城館	中世
125	四方坂館跡	城館	中世
126	小原遺跡	集落・散布地	縄文晩、平安
128	下原遺跡	散布地	縄文中
129	七日原遺跡	散布地	縄文前
130	経塚	経塚	中世
131	上原遺跡	散布地	縄文後
133	妙見遺跡	散布地	縄文晩
134	淡島山遺跡	散布地	縄文後、古代
135	立石遺跡	散布地	縄文後
136	八卦遺跡	散布地	縄文後
137	市ノ沢遺跡	散布地	弥生、古代
138	岩蔵寺遺跡	散布地	縄文晩、古代
139	小野入遺跡	散布地	縄文早・中～晩、古代
141	西脇古墳	円墳	古墳
142	清上遺跡	散布地	古代
143	上葉の木沢遺跡	散布地	古代
144	中葉の木沢遺跡	散布地	縄文、弥生、古代
145	円田入Ｃ遺跡	散布地	縄文
146	円田入Ｂ遺跡	散布地	縄文早・中
148	根無藤遺跡	散布地	縄文早・晩、古代
149	入山遺跡	散布地	縄文前、弥生、古代
150	官林遺跡	散布地	縄文早
151	手代木Ｂ遺跡	散布地	縄文早・後、古代
152	土橋遺跡	散布地	縄文後、弥生
153	上曲木Ｃ遺跡	散布地	縄文早・中
154	上曲木Ｅ遺跡	散布地	縄文前・中
155	曲木畑遺跡	散布地	縄文
156	上曲木Ｄ遺跡	散布地	縄文前・中
157	上曲木Ｂ遺跡	散布地	縄文早～中、古代
158	高木Ｂ遺跡	散布地	縄文
159	上曲木Ａ遺跡	散布地	縄文早、弥生、古代
160	西浦Ｂ遺跡	集落・散布地	縄文中～晩、弥生、平安、中世、近世
161	**寺門前遺跡**	散布地	縄文中・後
162	西浦Ｃ遺跡	散布地	縄文前～後、弥生、奈良、平安
163	白九頭竜古墳	古墳	古墳
164	沢北Ｂ遺跡	散布地	縄文後
165	北原尾遺跡	散布地	縄文早
166	天王前遺跡	散布地	縄文、古代
167	根方Ｂ遺跡	散布地	古代
168	山崎遺跡	散布地	縄文早
169	中野Ｂ遺跡	散布地	古代
170	桔梗山Ｂ遺跡	散布地	縄文
171	中沢Ｂ遺跡	散布地	弥生中、古墳、古代
172	豊向遺跡	散布地	古墳
173	諏訪館横穴墓群	横穴墓	古墳
174	諏訪館遺跡	散布地	弥生、古墳
175	新並遺跡	散布地	縄文中
176	角山Ｂ遺跡	散布地	縄文
177	角山Ａ遺跡	散布地	古代
178	青木遺跡	散布地	平安
179	山中遺跡	散布地	平安
180	入青木遺跡	散布地	縄文
183	沢入Ｂ遺跡	散布地	縄文後
184	三本槻Ａ遺跡	散布地	縄文早
185	遠森山遺跡	散布地	縄文晩？
186	沢入Ｃ遺跡	散布地	縄文
187	欠山遺跡	散布地	縄文
188	下永野Ｂ遺跡	散布地	奈良、平安
189	磯ヶ坂遺跡	集落・墓地・散布地	奈良、平安
190	若神子山Ｂ遺跡	散布地	縄文前・後
191	宮ヶ内上遺跡	製鉄	近世
192	館の山城跡	城館	中世
193	窪田遺跡	集落・散布地	縄文、弥生後、古墳中・後、飛鳥～平安、中世
194	三の輪遺跡	散布地	古墳、奈良、平安
196	**西屋敷遺跡**	集落・散布地	縄文、奈良、平安、中世、近世
197	戸ノ内遺跡	集落・散布地	縄文、弥生、飛鳥～平安、中世
198	車地蔵遺跡	集落・散布地	古代、中世、近世
199	三本槻Ｂ遺跡	散布地	縄文、平安
200	稲荷林遺跡	散布地	縄文早、古墳～平安
201	沢入Ｄ遺跡	散布地	縄文早・晩
202	観音堂山遺跡	集落・散布地	縄文後、平安
203	大久保西遺跡	散布地	古墳、奈良、平安
204	堀の内Ｂ遺跡	散布地	弥生、古墳
205	八幡山東遺跡	散布地	弥生、古代
206	堤遺跡	散布地	縄文、弥生、古墳、古代、中世
207	東山Ｂ遺跡	集落・散布地	縄文早・平安
208	願行寺廃寺跡	寺院・散布地	縄文、弥生、中世、近世
02092	井戸遺跡	散布地	縄文前・中、古代
02429	炭の平遺跡	散布地	縄文早・前
07015	北割山遺跡	散布地	縄文、弥生
07101	傾城山遺跡	散布地	縄文
07149	古峯神社古墳	前方後円墳	古墳
07180	**夕向原１号墳**	前方後円墳	古墳
07181	**夕向原２号墳**	円墳	古墳

（合計 203 か所）

※番号は宮城県遺跡登録番号のうち、蔵王町の市町村番号 05 を省略した下三桁を記載した（欠番は省略。第 7 図に記載した青色数字に対応）。
※五桁で記載した番号のうち 02 で始まるものは白石市、07 で始まるものは村田町登録分である。蔵王町の行政界にまたがるもののみを記載した。
※平成 28 年度に現場対応を実施した遺跡（第 2 表）は番号・遺跡名を太字で表記した。

第 2 章　平成 28 年度の調査概要

第 1 節　埋蔵文化財保護調整

蔵王町内における周知の埋蔵文化財包蔵地（遺跡）は現在 203 か所を数え、分布調査等による新規発見遺跡も随時追加されている。これらを文化財保護法に基づき適切に保護するため、各種開発を行なう際には、事業者に対して埋蔵文化財との関わりについての確認を求め、関わりが予想される場合には宮城県教育委員会と連携して埋蔵文化財保存協議を実施している。協議においては、開発予定地の地下の遺構の有無が不明な場合には「遺構確認調査」（註 1）、遺構面に影響を与えない工事や施工範囲が狭小な場合、遺構が存在する可能性が低い場合には「工事立会」（註 2）を行ない、過去に発掘調査済みあるいは遺構が存在しないことを確認済みの場合には「慎重工事」（註 3）としている。

さらに、遺構確認調査で遺構の分布が確認された場合には、必要に応じて事業者に計画の変更等を求め、遺跡の現状保存に努めている。また、事業主旨および緊急性などから遺跡の破壊が避けられない場合には、事前に「緊急発掘調査（本発掘調査）」（註 4）を行なって遺跡の記録保存を図ることとしている。

平成 28 年度の文化財保護法に基づく発掘届等（註 5）の件数は 14 件で、いずれも文化財保護法 93 条に基づく届出である。事業内容別では個人住宅 8 件、電気等 5 件、遊歩道 1 件で、回答内容別では発掘調査 8 件、工事立会 6 件である。昨年度の状況と比較すると、発掘届等の件数は 3 件の減少となっている。事業内容別では個人住宅の件数が増加した。また、電気等では昨年度と同様に太陽光発電所が 1 件あった。太陽光発電所については事業用地選定の段階での遺跡との関わりについての照会件数も多くなっている。大規模な造成工事を伴うこともあるため、事業計画を早期に把握して調整を図っていく必要がある。

第 2 節　埋蔵文化財の調査等

平成 28 年度の埋蔵文化財保存協議で現場対応を行なったのは 11 件（第 1 表、延べ 11 遺跡、過年度分の届出等に基づくものを含む）であった。対応の内訳は、本発掘調査 1 件、遺構確認調査 6 件、工事立会 4 件である。

このうち発掘調査 1 件（西屋敷遺跡）、遺構確認調査 4 件（寺門前遺跡、上野遺跡、夕向原 1・2 号墳、宋膳堂遺跡）で遺構を確認した。

西屋敷遺跡の集落道路（町道舘前磯ヶ坂線）改良工事予定地は、昨年度実施した遺構確認調査で遺構の分布が確認された範囲の約 420㎡を対象として本発掘調査を実施した。調査の結果、奈良時代前半の竪穴住居跡 2 軒などの遺構を確認し、土師器、須恵器などが出土した（町 23 集・印刷中）。

寺門前遺跡の個人住宅建築工事予定地では、土坑・柱穴など多数の遺構の分布を確認し、縄文土器・石器・礫石器・須恵器が出土した。遺構の時期は縄文

註 1. 周知の埋蔵文化財包蔵地内において遺構の有無や平面・垂直的な分布状況を把握する目的で実施するトレンチ調査。対象地の微地形を考慮しながら遺構の分布が予想される地点を中心に任意でトレンチを配置する。これにより遺構・遺物の包含深度や面積あたりの密度、包含環境を把握するとともに遺構の規模や性格を予想し、文化財保存協議の材料とする。また、事前調査を実施する場合の調査方法や期間、費用等の積算根拠とする。

註 2. 専門知識を有する埋蔵文化財担当職員が、工事の実施中に立ち会うこと。工事が埋蔵文化財を損壊しない範囲内で計画されているが、現地で状況を確認する必要がある場合、又は対象地が狭小で通常の発掘調査を実施できない場合に行なう。

註 3. 事業者が慎重に工事を実施すること。工事が埋蔵文化財を損壊しない範囲内で計画され、発掘調査や工事立会の必要がないと判断された場合に行なう。

註 4. 工事の実施前に文化財保護法に基づく記録保存の措置を講ずるために行なう発掘調査。工事によって埋蔵文化財が直接的に破壊される場合のほか、工事が影響を及ぼしたり、恒久的な工作物の設置によって以後の調査等が困難になると判断された場合に行なう。

註 5. 調査のための発掘に関する届出（第 92 条）、土木工事等のための発掘に関する届出（第 93 条）、国の機関または地方公共団体等が行う発掘に関する通知（第 94 条）がある。

時代中期頃と推定される。工事による掘削深度は浅く、遺構面に直接的な影響は及ばないことから現状保存とした。

上野遺跡の太陽光発電施設設置工事予定地では土坑・柱穴などの遺構を確認した。遺物は出土していないため、遺構の時期・性格等は不明である。太陽光発電パネル架台の基礎構造は単管パイプの打設によるもので、遺構面への影響は軽微であることから本発掘調査の対象としなかった。

夕向原古墳 1 号墳･2 号墳の遊歩道整備工事予定地は墳丘西側に沿うもので、古墳との関わりが予想された。工事の内容は表層の不陸整正工と木質チップ敷き均し工である。事前協議では古墳から出来るだけ離れたルートへの変更を求めたものの、地形的制約から大幅な変更は困難とのことであった。確認調査の結果、1 号墳では墳丘裾部が地山削り出しによって構築され、その外周に平坦面が設けられていた可能性が考えられた。2 号墳では墳端の可能性がある傾斜変換点を確認した。遺物は少量の土師器・弥生土器が出土した。遊歩道の計画ルートは墳丘裾部及び外周の平坦面の外側に位置しており、遺構への新たな影響は生じないことから現状保存とした。本事業は地元住民組織が主体となって取り組む里山整備の一環で、周辺には本遺跡のほか古峯神社古墳、愛宕山遺跡が立地する。整備される作業道･遊歩道については森林管理のほか遺跡の見学･散策路としての活用も見込まれる。

宋膳堂遺跡の個人住宅建築工事予定地では遺構 1 基を確認した。工事計画には柱状地盤改良工が含まれていることから、遺構の時期・性格等を把握するため堆積土の掘削を行なったところ、溝跡とみられることが判明した。遺物は土師器・須恵器・縄文土器が出土した。これ以外には遺構が存在しないものと判断されたので、調査区・遺構の記録を作成して調査を完了した。

第２表　平成 28 年度の埋蔵文化財保存協議にかかる確認調査・工事立会・慎重工事一覧

番号	遺跡名	遺跡番号	対応内容	協議箇所	調査原因	調査期間	対象面積	調査面積	遺構	主な調査成果 （旧地形／遺構確認面／遺構／遺物）
1	**寺門前遺跡**	05161	確認調査	円田字西浦北 66-6	個人住宅建築工事計画	平成 28 年 6 月 24・27 日	511.8㎡	118.9㎡	有	段丘平坦面／漸移層／土坑 32・柱穴ほか／縄文土器・石器・礫石器・須恵器
2	長峰遺跡 隣接地	05005	確認調査	宮字新佐屋戸 13-2	個人住宅建築工事計画	平成 28 年 8 月 4 日	353.0㎡	14.4㎡	無	削平面／砂礫層
3	平沢館跡	05050	確認調査	平沢字内屋敷 21-5	個人住宅建築工事計画	平成 28 年 10 月 14 日	332.9㎡	13.9㎡	無	削平面／白色粘土層
4	西屋敷遺跡	05196	発掘調査	大字小村崎字西屋敷 地内	農地整備事業（円田２期地区） 集落道路２号線拡幅工事計画	平成 28 年 10 月 24 日～ 12 月 22 日	420.0㎡	420.0㎡	有	丘陵平坦面・削平面（西部），丘陵斜面・埋没谷（東部）／ローム層／竪穴住居跡４・土坑８・溝４ほか／土師器，ロクロ土師器，須恵器，弥生土器，陶磁器，石器，礫石器，石製品，古銭
5	都遺跡 前戸内遺跡	05015 05108	工事立会	平沢字都 地内 小村崎字前戸内 地内	農地整備事業（円田２期地区） 還元パイプライン設備工事 暗渠排水設備工事	平成 28 年 10 月 26 日，12 月 13 日 平成 29 年 3 月 17 日，4 月 7 日	146.6ha	-	有	都遺跡：撹乱層，盛土部，削平面／ローム層，低湿地／黒色粘質シルト 前戸内遺跡：盛土部，削平面／ローム層
6	寺門前遺跡	05161	工事立会	円田字西浦北 67-2	電柱移設工事	平成 28 年 11 月 7 日	1.0㎡	-	無	ローム層
7	**上野遺跡**	**05016**	確認調査	円田字東山 47，49-2	太陽光発電施設設置工事計画	平成 28 年 11 月 17 日	1231.2㎡	177.4㎡	有	段丘平坦面／漸移層／土坑 20・柱穴多数
8	本宿前遺跡	05091	工事立会	円田字沢 43-4	個人住宅建築工事	平成 28 年 11 月 20・21 日	476.0㎡	-	無	削平面／白色粘土・砂礫層
9	寺門前遺跡	05161	工事立会	円田字西浦北 66-7	個人住宅建築工事	平成 28 年 12 月 19 日	485.6㎡	-	無	盛土部
10	**夕向原１号墳** **夕向原２号墳**	07180 07181	確認調査	平沢字屋木戸内 地内	遊歩道整備工事計画	平成 28 年 12 月 21・22・26 日	325.0㎡	31.0㎡	有	丘陵尾根部／漸移層／墳丘裾部・平坦面／土師器・弥生土器
11	**宋膳堂遺跡**	05008	確認調査	円田字見継 1-1，1-3	個人住宅建築工事計画	平成 29 年 2 月 21 日	73.3㎡	26.9㎡	有	削平面（北東部），埋没谷（南西部）／漸移層／溝１／土師器・須恵器・縄文土器

※番号は第７図の緑色丸数字に対応する。第３章で報告する調査は番号と遺跡名を太字で表記した。なお、調査原因は本表で表記を統一しており協議書等に記載された事業名とは一致しない場合がある。

第３章　調査の成果

第１節　遺構確認調査

１．寺門前遺跡

調査要項（第２表１）

遺 跡 名　寺門前遺跡（遺跡登録番号 05161）
調査原因　個人住宅建築工事計画
調査箇所　蔵王町大字円田字西浦北 66-6
調査期間　平成 28 年 6 月 24・27 日
対象面積　511.8㎡
調査面積　118.9㎡
調査主体　蔵王町教育委員会
調 査 員　鈴木 雅

第８図　調査地点位置図

遺跡の概要　松川左岸の矢附段丘面上に立地し、縄文時代の散布地として登録されている。周辺には縄文時代の遺跡が多く分布し、同一地形面上の東側に西浦Ｂ遺跡（註１）、西側に曲木遺跡・十文字遺跡、南側に谷地遺跡（註２）が隣接する。また、北側の上位面（永野段丘面）には鞘堂山遺跡（註３）・高木遺跡などが分布する。本遺跡の範囲は東西約 350 m、南北約 250m で、地形は起伏に乏しく南東方向に約 3.3% の勾配で緩やかに傾斜する。遺物の表面散布は遺跡東部に顕著で、縄文土器・石器などが採集されている。本遺跡では平成 23 年度に遺跡西部で社会福祉施設建設計画に伴う遺構確認調査を実施し、縄文時代中期前半の土坑などの遺構・遺物の比較的濃密な分布を確認している（註 4）。

調査の成果　敷地内の遺構の分布状況を把握するため、トレンチ３か所を設定して調査を実施した。旧地形は現況とほぼ同じで、基本層序はⅠ層：表土（耕作土）、Ⅱ層：旧耕作土、Ⅲ層：黒ボク土、Ⅳ層：漸移層となる。遺構確認面は漸移層中位である。遺構は全てのトレンチで比較的濃密な分布を確認した。確認した遺構は土坑 32 基、柱穴など多数である（註 5）。なお、２トレンチ北部で確認した幅 0.6m ほどの溝跡は堆積土がⅡ層に類似することから新しい掘

註 1.　平成 21 年度に商業施設出店計画に伴う発掘調査を実施し、縄文時代後期前葉の集落跡を確認している（町 10 集）。
註 2.　平成 23・24 年度に消防庁舎建設用地造成計画に伴う発掘調査を実施し、縄文時代中期前半の集落跡を確認している（町 20 集）。
註 3.　平成 10 年度に町道高木曲木線拡幅工事に伴う発掘調査を実施し、縄文時代中期中葉の集落跡を確認している（蔵王町教育委員会 1998）。
註 4.　平成 23 年度の確認調査地点は谷地遺跡の調査地点（註 1）の至近に位置する。確認した遺構・遺物の内容に共通性があることから、両遺跡には縄文時代中期前半の一体的な遺構分布が広がっていると考えられる。

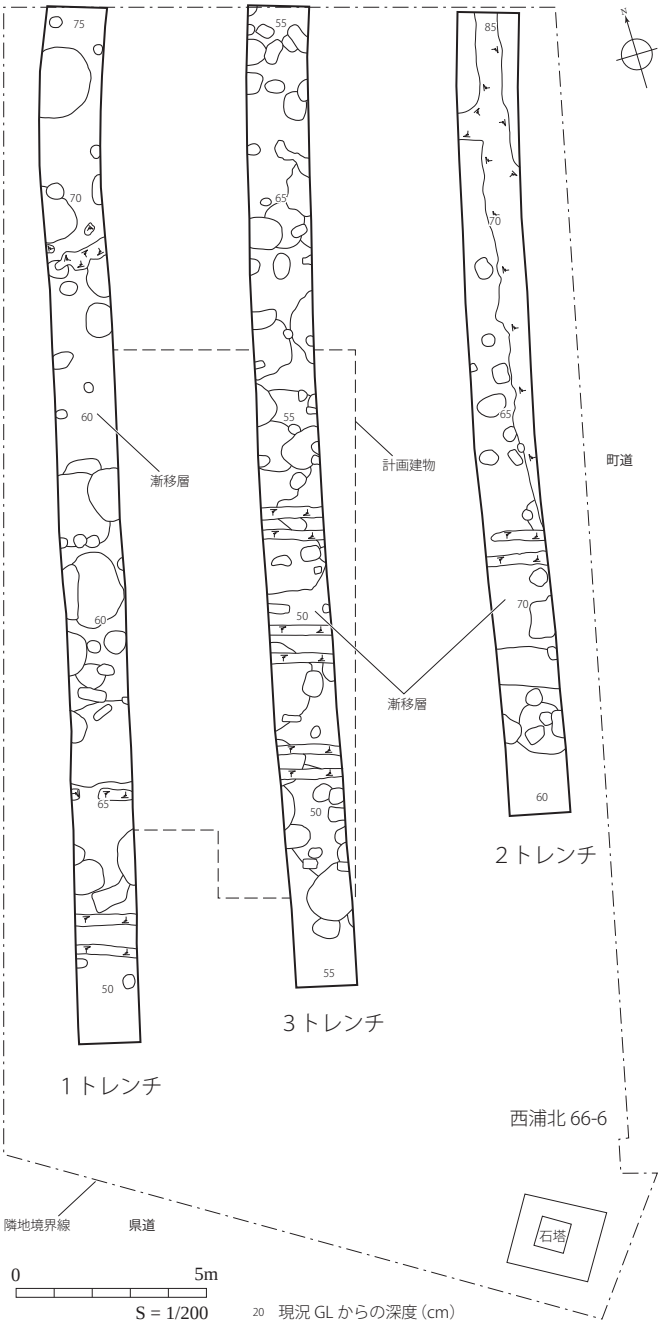
写真１　調査前現況（南から）

写真２　調査前現況（北東から）

り込みと判断した。遺物は遺構確認面・トレンチ排土から縄文土器・須恵器・石器・礫石器が出土した。縄文土器は渦巻状沈線文（写真 13-7・21）、平行沈線文＋付加「Ｌ」字状沈線文（写真 13-25）、ユビナデ状条痕文（写真 13-17・18）などが見られ、主に大木 8a 式とみられる。須恵器（写真 13-9）は器種が不明な体部破片で、外面にヘラケズリ調整、内面に細かいハケメ状のヘラナデ調整を施す。石器は流紋岩製の二次加工ある剥片（写真 13-28）、珪質頁岩・珪化凝灰岩・流紋岩製の剥片（写真 13-10・15・30 ～ 32）などがある。礫石器（写真 13-33）は石皿の破片である。

今回の工事による掘削深度は遺構面に及ばないことから、確認した遺構は現状保存とした。

註 5. 便宜的に平面プランの長軸が 100cm 以上のものを土坑とし、これより小型のものを柱穴として計数した。



第９図　調査区遺構配置図

写真３　遺構確認作業

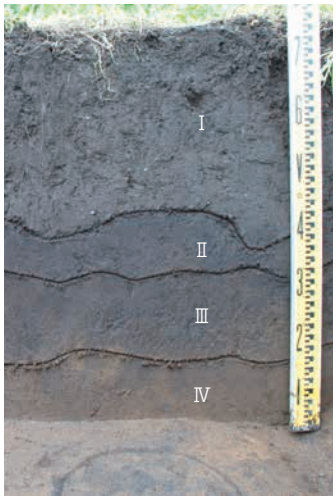


写真４　土層断面
（１トレンチ北西隅）

写真 5　トレンチ掘削状況（北から）

写真 6　調査風景（北から）

写真 7　1 トレンチ（南から）

写真 8　2 トレンチ（南から）

写真 9　3 トレンチ（南から）

写真 10　1 トレンチ（北から）

写真 11　2 トレンチ（北から）

写真 12　3 トレンチ（北から）

1 ～ 10：１トレンチ遺構確認面 ／ 1 ～ 8：縄文土器、9：須恵器、10：剥片（珪質頁岩）

11 ～ 15：２トレンチ遺構確認面 ／ 11 ～ 14：縄文土器、15：剥片（流紋岩）

16 ～ 27：３トレンチ遺構確認面 ／ 縄文土器

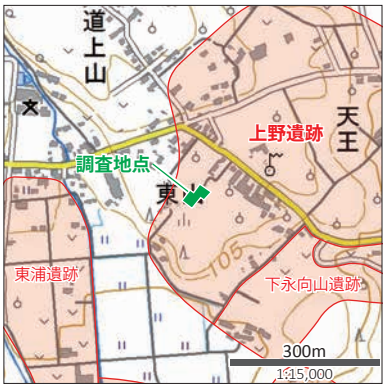
28 ～ 33：３トレンチ遺構確認面 ／ 28：二次加工ある剥片（流紋岩）、29:剥片（珪質頁岩）、30･31:剥片（流紋岩）、32:剥片（珪化凝灰岩）33：石皿（安山岩）

写真 13　出土遺物

2．上野遺跡

調査要項（第 2 表 7）

遺 跡 名　上野遺跡（遺跡登録番号 05016）
調査原因　太陽光発電施設設置工事計画
調査箇所　蔵王町大字円田字東山 47，49-2
調査期間　平成 28 年 11 月 17 日
対象面積　1231.2㎡
調査面積　177.4㎡
調査主体　蔵王町教育委員会
調 査 員　鈴木 雅



第 10 図　調査地点位置図

遺跡の概要　松川左岸の永野段丘面上に立地し、縄文・弥生・平安時代の散布地として登録されている。周辺には縄文時代～古代の遺跡が多く分布し、同一地形面上の東側に天王遺跡･下永向山遺跡、蟹沢遺跡、天王古墳群が隣接する。本遺跡の範囲は東西約 600 m、南北約 650m で、地形は西部が比較的平坦で、東部は東向きの緩斜面となっている。本遺跡の発見は比較的早く、多数の遺物が採集されているが（註 6）、現況で確認できる遺物の表面散布は比較的散漫である。本遺跡では過去に遺跡北部を東西に横断する町道の改良工事に伴う遺構確認調査などを実施しているが、遺構を確認したことはない。

調査の成果　工事計画範囲の遺構の分布状況を把握するため、トレンチ 5 か所を設定して調査を実施した。旧地形は南向きの緩斜面で、過去に建物が立地していた敷地北部では厚さ 40 ～ 70cm の盛土による造成が行なわれていることが判明した。基本層序は Ⅰ 層：現代の盛土、Ⅱ 層：現代の耕作土、Ⅲ 層：漸移層となる。遺構確認面は漸移層中位である。遺構は全てのトレンチでやや濃密な分布を確認した。確認した遺構は土坑 20 基、柱穴など多数である（註 7）。遺構の平面プランはやや不明瞭であったことから数基の掘削を行なったところ、壁面の立ち上がりが明瞭で人為的な遺構と判断できるものと、壁面の立ち上がりがなく底面が不整な自然地層の誤認と思われるものとがあった。このため、今回確認した平面プランは遺構の可能性を示すものであり、正確には掘削を伴う調査によって判断する必要がある。遺物は出土しなかった。

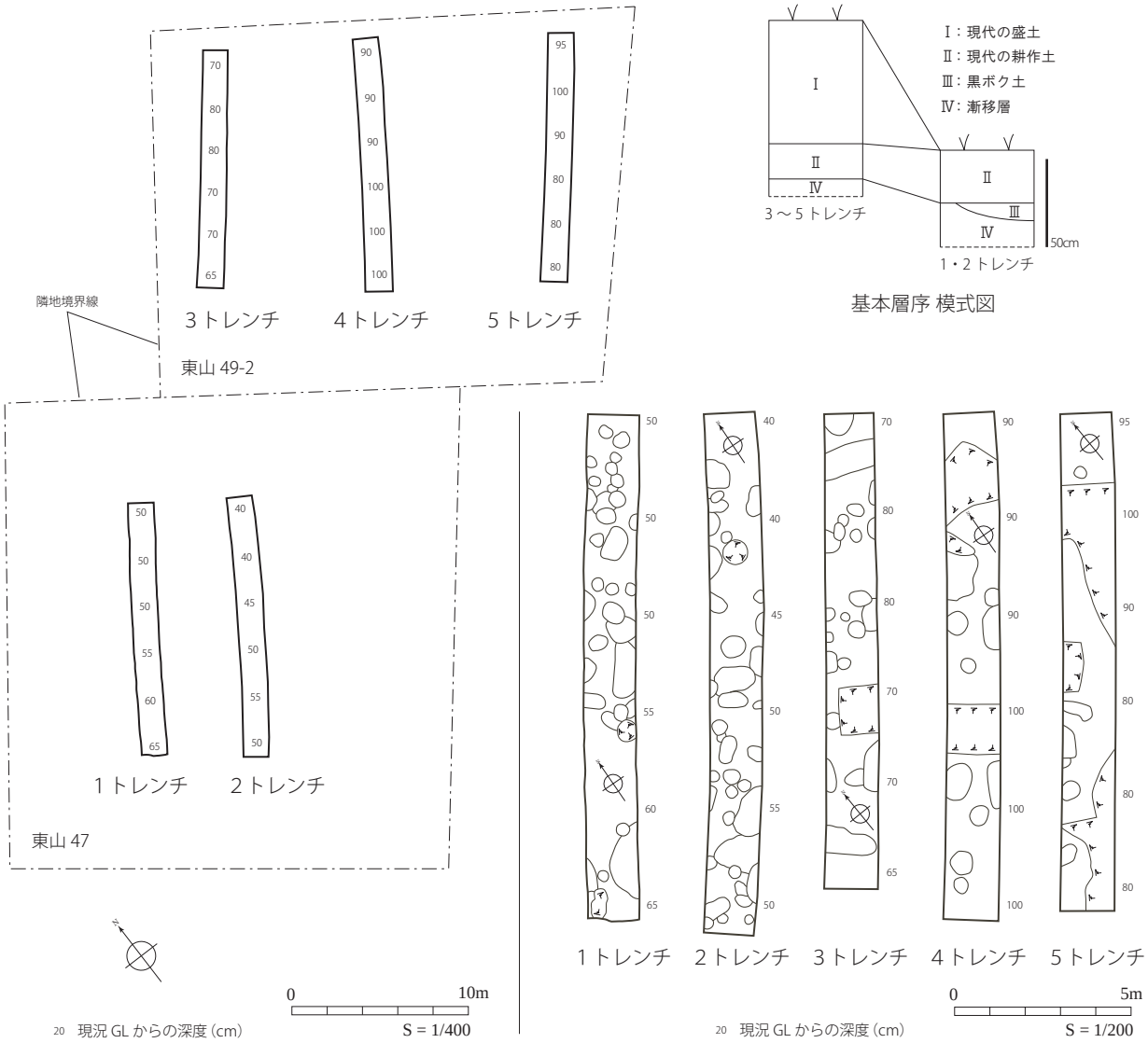
今回の工事による影響は軽微であることから、確認した遺構は現状保存とした。

註 6.「刈田郡誌」は「塩沢上ノ原」から石器が採集されたことを記す（刈田郡教育会 1928）。戦後に佐藤庄吉・小島亮治らによって多数の遺物が採集されて注目された（佐藤 1957）。過去の調査カード（作成年不詳）には「桃畑に散在しているさまは驚く程なり」とある。採集されている遺物は円田式に含まれる弥生土器が主体的である。

註 7. 便宜的に平面プランの長軸が 100cm 以上のものを土坑とし、これより小型のものを柱穴として計数した。

写真 14　トレンチ掘削状況（南西から）

写真 15　トレンチ掘削状況（北東から）



第 11 図　調査区遺構配置図

写真 16　1 トレンチ（南西から）

写真 17　1 トレンチ（北東から）

写真 18　2 トレンチ（南西から）

写真 19　2 トレンチ（北東から）

写真 20　3 トレンチ（南西から）

写真 21　3 トレンチ（北東から）

写真 22　4 トレンチ（南西から）

写真 23　5 トレンチ（南西から）

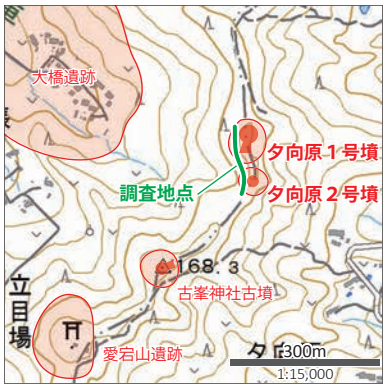
写真 24　5 トレンチ（北東から）

写真 25　トレンチ掘削状況（北東から）

3．夕向原古墳群

調査要項（第 2 表 10）

遺 跡 名　夕向原 1 号墳（遺跡登録番号 07180）
　　夕向原 2 号墳（遺跡登録番号 07181）
調査原因　遊歩道整備工事計画
調査箇所　蔵王町大字平沢字屋木戸内 地内
調査期間　平成 28 年 12 月 21・22・26 日
対象面積　325.0㎡
調査面積　31.0㎡
調査主体　蔵王町教育委員会
調 査 員　鈴木 雅・庄子善昭



第 12 図　調査地点位置図

遺跡の概要　円田盆地と村田盆地を画する愛宕山丘陵の尾根上に立地し、古墳時代の古墳として登録されている。周辺には古墳時代～古代の遺跡が多く分布し、本遺跡と連続する尾根上に古峯神社古墳（註 8）、愛宕山遺跡（註 9）が立地する。また、西側の円田盆地に面した丘陵麓には大橋遺跡・立目場遺跡・中沢 A 遺跡（註 10）などが立地している。本遺跡では平成 9 年に藤沢敦氏らによる測量調査が行なわれ、1 号墳は主軸長約 57m の前方後円墳、2 号墳は直径約 24m の円墳と推定されている（藤澤 2000）。

調査の成果　工事計画範囲と墳丘裾部の関わりを確認するため、1 号墳西側に 3 か所、2 号墳西側に 1 か所の計 4 か所のトレンチを設定して調査を実施した。基本層序は Ⅰ 層：表土（腐植土）、Ⅱ 層：暗褐色シルト（褐色森林土）、Ⅲ 層：漸移層、Ⅳ 層：黄褐色ロームである。各トレンチ西端は既存通路の踏圧の影響が見られた。さらに西側は丘陵斜面で急傾斜となる。1 号墳西側の 2 ～ 4 トレンチでは墳丘裾部を幅 2m 前後の帯状に巡る暗褐色シルトの堆積を確認し、一部の掘削を行なったところ不明瞭ながら地山削り出しによる墳丘裾部と平坦面の可能性が考えられた。2 号墳西側の 1 トレンチでは墳丘裾部にわずかな傾斜変換点が確認された。また、トレンチ西端でⅢ 層上面の傾斜がやや急になっており、傾斜変換点の西側が平坦面となっていた可能性がある。遺物は各トレンチの表土中から少量の土師器片、弥生土器片などが出土した（写真 26）。

上記の結果から、1 号墳、2 号墳ともに墳丘西側の裾部が地山削り出しによって構築され、外側に平坦面が設けられていた可能性が考えられた。工事計画ルートは 1 号墳では平坦面の外側、2 号墳では傾斜変換点の外側に位置している。工事内容は表層の不陸整正工と木質チップ敷き均し工であり、遺構への新たな影響は生じないことから現状保存とした。

1：1 号墳（4 トレンチ）表土／弥生土器

2～5：2 号墳（1 トレンチ）表土／2～4：弥生土器、5：土師器

写真 26　出土遺物

註 8.　平成 8 年に藤澤敦氏らによる測量調査が行なわれ、主軸長約 38m の前方後円墳であることが判明している（藤澤 2000）。別称：由ヶ沢（よしがさわ）古墳。

註 9.　平成 24・25 年度に愛宕神社神楽殿再建及び参道改良工事に伴う発掘調査を実施し、古墳時代前期の住居跡などを確認している（町 18・20 集）。

註 10.　大橋遺跡では古墳時代前期（昭和 45 年、東北自動車道建設、宮城県教育委員会 1980）、立目場遺跡では古墳時代前期・中期（平成 16 年、農道改良事業）、中沢 A 遺跡では古墳時代中期（平成 13・14 年、農道改良事業、町 5 集）の集落跡を確認している。

写真 27　1 号墳前方部側墳端（南から）

写真 28　1 号墳前方部側墳端（西から）

写真 29　1 号墳くびれ部（南から）

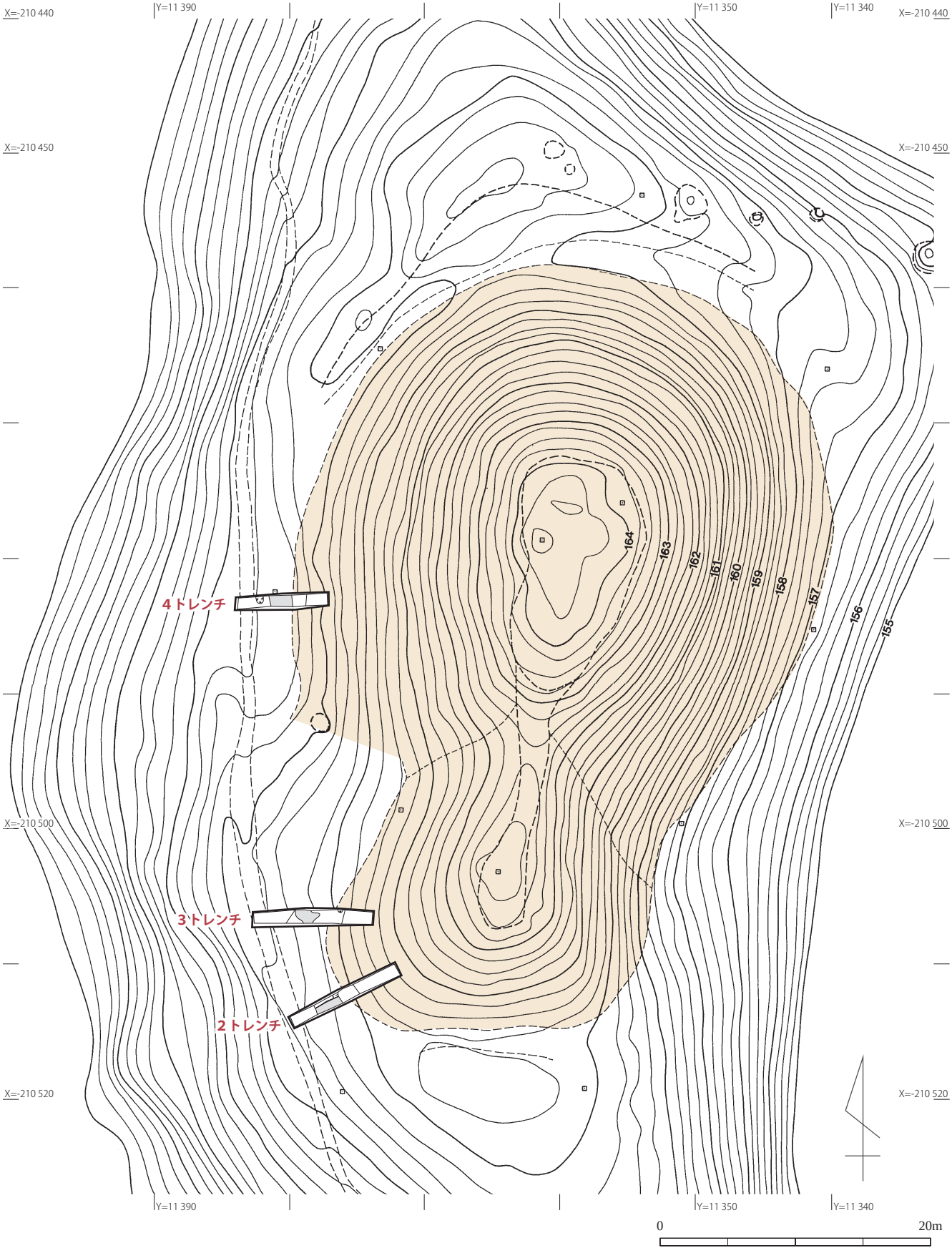
写真 30　1 号墳くびれ部（西から）

写真 31　1 号墳後円部側墳端（北から）

写真 32　1 号墳後円部側墳端（西から）

写真 33　2 号墳付近からの眺望（東方向に太平洋を望む）

写真 34　1 号墳付近からの眺望（西方向に蔵王連峰を望む）



測量図：藤沢敦（2000，縮尺 1/500）を複製・拡大して使用

第 13 図　調査区配置図（１号墳）

写真 35　1 号墳全景（南西から）

写真 36　1 号墳トレンチ掘削状況（北東から）

写真 37　1 号墳トレンチ掘削状況（北西から）

写真 38　1 号墳 2 トレンチ（南西から）

写真 39　1 号墳 2 トレンチ（南西から）

写真 40　1 号墳 2 トレンチ土層断面（南から）

写真 41　1 号墳 2 トレンチ土層断面（南東から）

写真 42　1 号墳 3 トレンチ（西から）

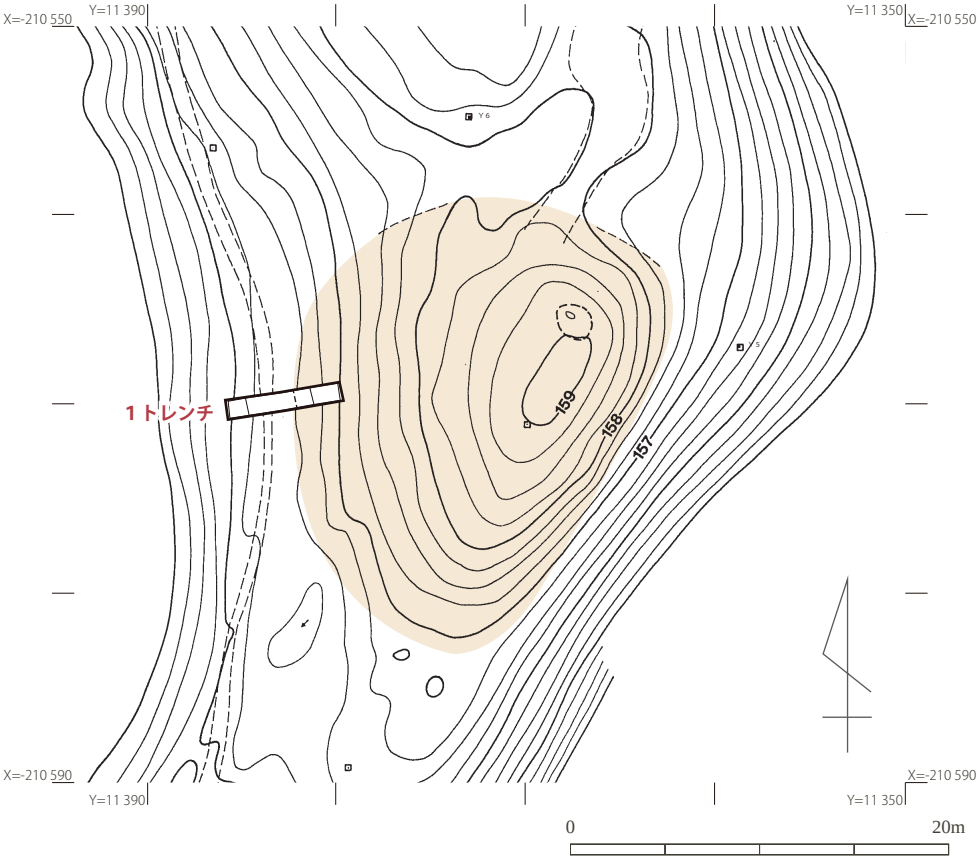
写真 43　1 号墳 3 トレンチ土層断面（南西から）

写真 44　1 号墳 3 トレンチ（西から）

写真 45　1 号墳 4 トレンチ（西から）

写真 46　1 号墳 4 トレンチ土層断面（南西から）

写真 47　1 号墳 4 トレンチ（西から）



測量図：藤沢敦（2000，縮尺 1/500）を複製・拡大して使用　　S = 1/400

第 14 図　調査区配置図（2 号墳）

写真 48　2 号墳全景（南西から）

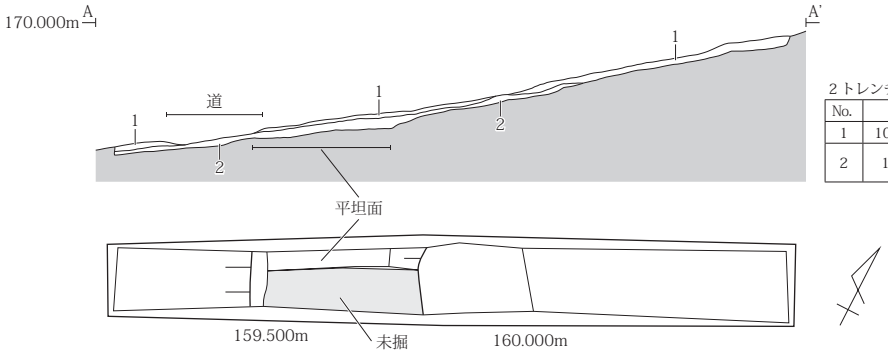
写真 49　2 号墳 1 トレンチ作業風景

写真 50　2 号墳 1 トレンチ（西から）

写真 51　2 号墳 1 トレンチ土層断面（北西から）

（１号墳）

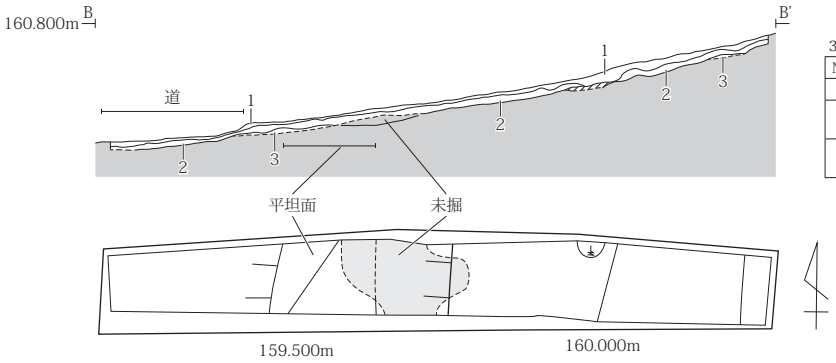
２トレンチ



２トレンチ北壁土層断面　A-A'

No.	土色	土性	含有物等
1	10YR3/2 黒褐	シルト	表土（腐植土）
2	10YR4/6 褐	シルト	黒色シルトブロック含む（褐色森林土）

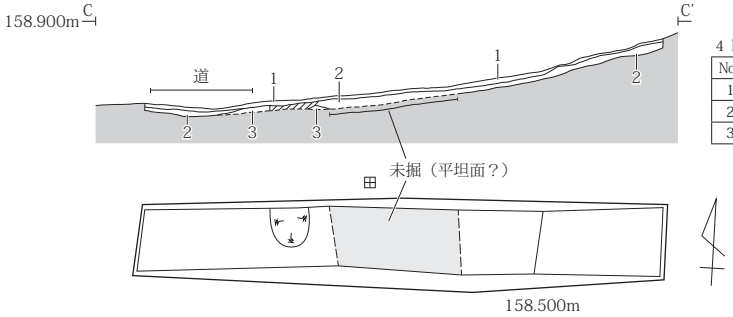
３トレンチ



３トレンチ北壁土層断面　B-B'

No.	土色	土性	含有物等
1	10YR3/2 黒褐	シルト	表土（腐植土）
2	10YR4/2 灰黄褐	シルト	暗褐色シルトブロック含む（褐色森林土）
3	10YR4/4 褐	シルト	黄褐色シルトブロック含む（漸移層）

４トレンチ

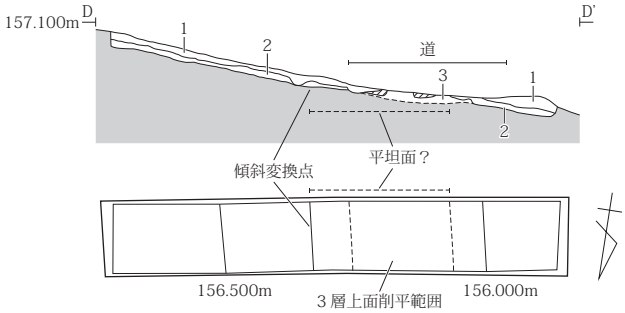


４トレンチ北壁土層断面　C-C'

No.	土色	土性	含有物等
1	10YR3/2 黒褐	シルト	表土（腐植土）
2	10YR4/2 灰黄褐	シルト	暗褐色シルトブロック含む（褐色森林土）
3	10YR4/4 褐	シルト	黄褐色シルトブロック含む（漸移層）

（２号墳）

１トレンチ



１トレンチ北壁土層断面　D-D'

No.	土色	土性	含有物等
1	10YR3/2 黒褐	シルト	表土（腐植土）
2	10YR3/3 暗褐色	シルト	黒褐色シルトブロック含む（褐色森林土）
3	10YR4/4 褐	シルト	黄褐色シルトブロック含む（漸移層）

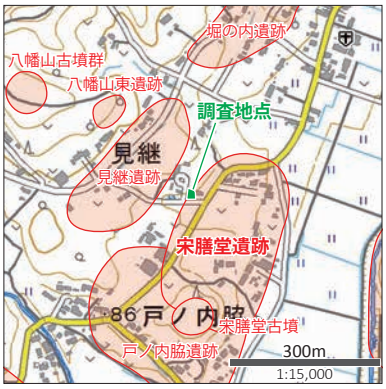
0　2m
S = 1/100

第 15 図　調査区平面・断面図

4．宋膳堂遺跡

調査要項（第 2 表 11）

遺 跡 名　宋膳堂遺跡（遺跡登録番号 05008）
調査原因　個人住宅建築工事計画
調査箇所　蔵王町大字円田字見継 1-1，1-3
調査期間　平成 29 年 2 月 21 日
対象面積　73.3㎡
調査面積　26.9㎡
調査主体　蔵王町教育委員会
調 査 員　鈴木 雅



第 16 図　調査地点位置図

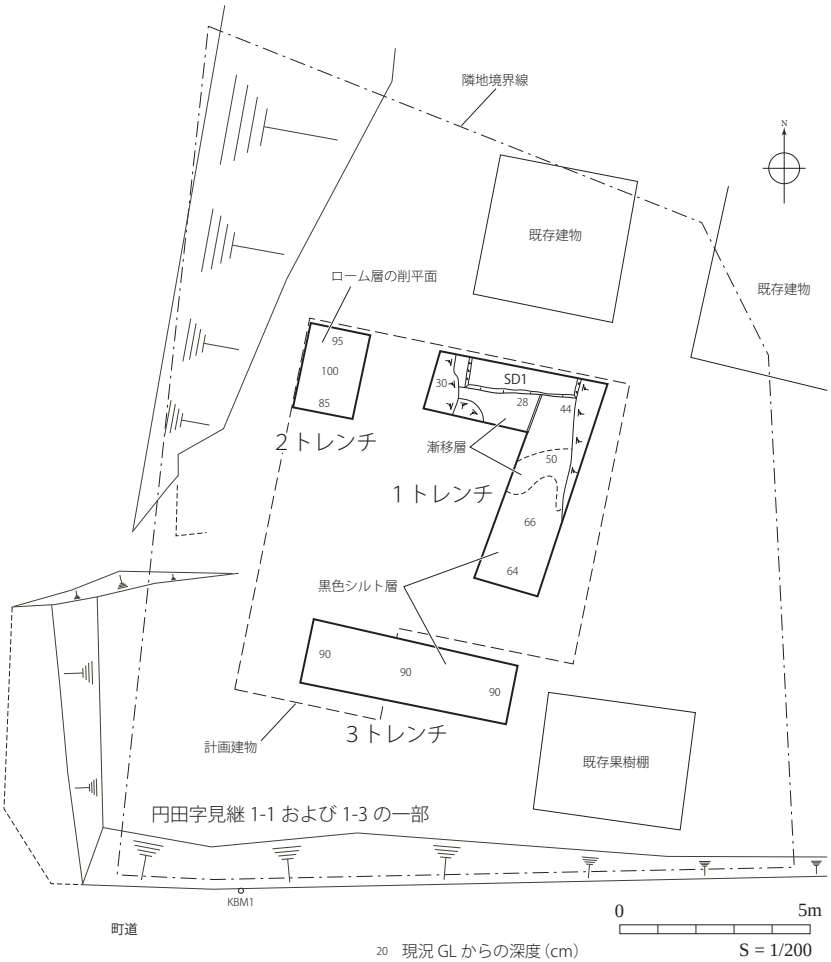
遺跡の概要　円田盆地西側の矢附段丘面上に立地し、弥生・古墳・平安時代の散布地として登録されている。本遺跡の南側には宋膳堂古墳、戸ノ内脇遺跡が隣接する。本遺跡の範囲は南北約 320m、東西約 280m で、地形は北東方向に約 5% の勾配で緩やかに傾斜し、東側は緩やかな段丘崖となっている。遺物の表面散布は比較的広範囲に認められ、弥生土器・土師器などが採集されている。本遺跡ではこれまでに発掘調査は行なわれていない。

調査の成果　建築計画範囲の遺構の分布状況を把握するため、トレンチ 3 か所を設定して調査を実施した。現況は平坦に造成された宅地であるが、周囲の地形と調査結果から旧地形は南西向き斜面で、基本層序は Ⅰ 層：現代の盛土整地層、Ⅱ 層：黒色シルト、Ⅲ 層：漸移層、Ⅳ 層：黄褐色ロームとなる。1 トレンチ北東部は漸移層の削平面となっており、1 トレンチ北西部から 2 トレンチにかけては攪乱坑によって大きく掘削を受けていることが判明した。また、1 トレンチ南西部から 3 トレンチにかけては湿地性の黒色シルトが厚く堆積し、敷地南側を東西に伸びる埋没谷地形の一部と考えられた。遺構は 1 トレンチ北部の漸移層の削平面で溝跡 1 条（SD1）を確認した。幅 80cm 以上で東西方向に直線的に 3.4m 以上延びており、両端が攪乱によって壊されている。遺構の性格を把握する目的で堆積土の掘削を行なったところ、横断面形は逆台形を呈し、底面は東側へ向かって低く緩やかに傾斜していることが判明した。堆積土は 1 層で、土師器、須恵器、縄文土器が出土した（写真 60）。土師器は小型品、甕類の小片で、小型品には赤彩を施すものがある。須恵器は小型品の小片で焼成が良好である。縄文土器は胎土に繊維を混入する。

今回の工事による掘削範囲内には、掘削を行なった溝跡 1 条の他には遺構が存在しないものと判断されたので、遺構の記録を作成して調査を完了した。

写真 52　調査前現況（南から）

写真 53　調査前現況（西から）

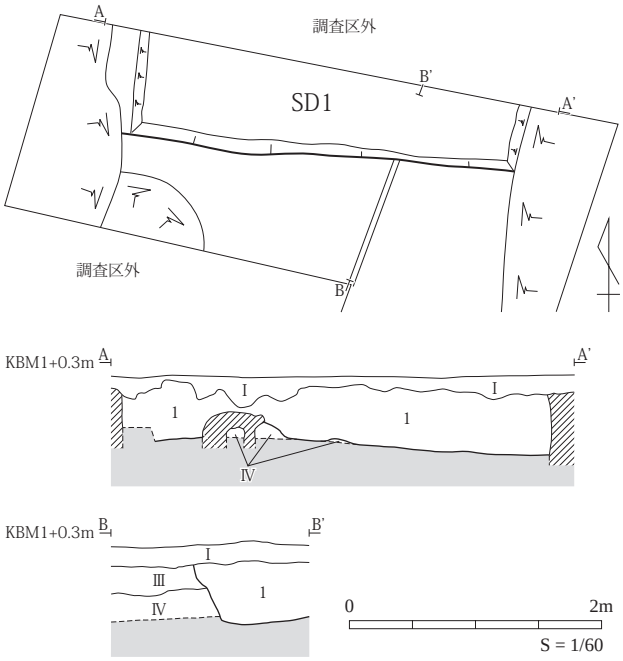


第 17 図　調査区遺構配置図

写真 54　1 トレンチ（南から）

写真 55　1 トレンチ（北から）

写真 56　1 トレンチ（東から）



SD1 溝跡　A-A'，B-B'

No.	土色	土性	含有物等
1	10YR2/3 黒褐	シルト	ロームブロック・粒含む ／ 炭化物・スコリア片：少量

第 18 図　SD1 溝跡

写真 57　SD1 溝跡（西から）

写真 58　SD1 溝跡断面（南から）

写真 59　SD1 溝跡断面（東から）

1 ～ 12：SD1 溝跡 1 層 ／ 1 ～ 10：土師器（1・2・5・6：内外面赤彩、7：外面赤彩）、11：須恵器、12：縄文土器（胎土に繊維混入）

写真 60　出土遺物

第4章　総　括

1．本書では、平成28年度に実施した埋蔵文化財保存協議の概要と、これに伴って実施した発掘調査のうち、下記の調査について報告した。

各種開発事業と遺跡の関わりの詳細を確認する目的で実施した遺構確認調査（4件4遺跡）

2．遺構確認調査では、下記のことが明らかになった。

（1）寺門前遺跡

個人住宅建築工事予定地は遺跡範囲南東部の段丘平坦面に立地する。調査の結果、縄文時代中期頃の土坑32基などの遺構を確認した。遺物は遺構確認面などから縄文土器、石器、礫石器などが出土した。

（2）上野遺跡

太陽光発電施設設置工事予定地は遺跡範囲西部の段丘平坦面に立地する。調査の結果、時期不明の土坑20基などの遺構を確認した。遺物は出土しなかった。

（3）夕向原古墳群

遊歩道整備工事予定地は1号墳･2号墳の墳丘西側裾部に立地する。調査の結果、1号墳・2号墳ともに墳丘裾部が地山削り出しによって構築され、その外周に平坦面が設けられていた可能性が考えられた。遺物は表土中から少量の土師器、弥生土器が出土した。

（4）宋膳堂遺跡

個人住宅建築工事予定地は遺跡範囲西部の丘陵斜面に立地する。調査の結果、時期不明の溝跡1条を確認した。遺物は溝跡の堆積土から土師器、須恵器などが出土した。

引用・参考文献

相原淳一 2016「宮城県における薄手無文土器の再検討－宮城県蔵王町上原田遺跡・明神裏遺跡－」東北歴史博物館 研究紀要 17　東北歴史博物館

板垣直俊・豊島正幸・寺戸恒夫 1981「仙台およびその周辺地域に分布する洪積世末期のスコリア層」東北地理　33　東北地理学会

伊東信雄 1955「各地域の弥生式土器－東北－」『日本考古学講座 4』杉原荘介編　河出書房

大場正善 2004「宮城県柴田郡村田町新川流域遺跡群について－東北地方南部太平洋側にある後期旧石器時代の玉髄原産地遺跡からの予察－」宮城考古学　6　宮城県考古学会

小山正忠・竹原秀雄 1967「新版　標準土色帖（2005 年版）」農林水産省農林水産技術会議事務局監修　日本色研事業株式会社

風間観静 1983「仙台藩の街道」『宮城の研究 5　近世編Ⅲ』渡辺信夫編　清文堂

刈田郡教育会 1928『刈田郡誌』宮城県刈田郡教育会編

北村信 1985「表層地質」『土地分類基本調査　白石　5 万分の 1』 宮城県

蔵王町史編纂委員会 1987『蔵王町史　資料編Ⅰ』

蔵王町史編纂委員会 1989『蔵王町史　資料編Ⅱ』

蔵王町史編纂委員会 1993『蔵王町史　民俗生活編』

蔵王町史編纂委員会 1994『蔵王町史　通史編』

蔵王町教育委員会 1998「鞘堂山遺跡」『平成 10 年度　宮城県遺跡調査成果発表会　発表要旨』 宮城県考古学会

佐々木繁喜 2009「蔵王町から発見された黒曜石について」地学部会誌　46　宮城県高等学校理科研究会

佐藤庄吉 1957『刈田郡全域土器石器調査表』（孔版） 不忘郷土研究所

白石市教育委員会 1968『白石市周辺の遺跡遺物目録』白石市文化財調査報告書　7

白石市史編纂委員会 1976『白石市史　別巻　考古資料篇』

白石市史編纂委員会 1979『白石市史　Ⅰ　通史篇』

杉原重夫・金成太郎・弦巻千晶・弦巻賢介・佐藤裕亮・金木利憲 2011「宮城県刈田郡蔵王町内出土黒曜石製遺物の原産地推定」『西浦Ｂ遺跡－商業施設出店計画に伴う緊急発掘調査－』蔵王町文化財調査報告書　10　蔵王町教育委員会

鈴木雅・佐々木繁喜 2016「縄文時代の蔵王東麓における黒曜石利用－谷地遺跡ほか出土黒曜石の原産地推定から－」宮城考古学　18　宮城県考古学会

名取市教育委員会・宮城県病院局 2002『野田山遺跡－宮城県立がんセンター緩和ケア病棟建設関係発掘調査報告書－』名取市文化財調査報告書　47

林謙作 1962「東北地方早期縄文文化の展望」考古学研究　9-2　考古学研究会

伴雅雄・及川輝樹・山﨑誠子 2015『蔵王火山地質図』 火山地質図 18　独立行政法人産業技術総合研究所地質調査総合センター

藤澤敦 2000「阿武隈川下流域の前方後円墳（その 1)」宮城考古学　2　宮城県考古学会

細野衛 1994「土壌の分布と種類」『新版地学教育講座⑨　地表環境の地学－地形と土壌』地学団体研究会編　東海大学出版会

宮城県教育委員会 1980「大橋遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅳ』宮城県文化財調査報告書　80

宮城県教育委員会 1980「持長地遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅳ』宮城県文化財調査報告書　80

宮城県教育委員会 1984『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅸ（二屋敷遺跡)』宮城県文化財調査報告書　99

宮城県教育委員会ほか 1987『小梁川遺跡』「七ヶ宿ダム関連遺跡発掘調査報告書Ⅲ」宮城県文化財調査報告書　122

宮城県教育委員会 2003「十郎田遺跡ほか」『壇の越遺跡ほか』宮城県文化財調査報告書　195

宮城県教育委員会 2010『鍛冶沢遺跡ほか』宮城県文化財調査報告書　222

蔵王町文化財調査報告書（蔵王町教育委員会発行）

（1990）『堀ノ内遺跡』
第 1 集（1997）『堀の内遺跡』
第 2 集（2002）『諏訪舘前遺跡』
第 3 集（2005）『都遺跡ほか（都遺跡・窪田遺跡・新城館跡）』
第 4 集（2006）『車地蔵遺跡・鍛冶屋敷遺跡ほか』
第 5 集（2007）『中沢 A 遺跡』
第 6 集（2008）『六角遺跡－経営体育成基盤整備事業（県営ほ場整備事業）に伴う緊急発掘調査－』
第 8 集（2009）『戸ノ内遺跡－経営体育成基盤整備事業（県営ほ場整備事業）に伴う緊急発掘調査－』
第 9 集（2009）『青竹遺跡』
第 10 集（2011）『西浦 B 遺跡－商業施設出店計画に伴う緊急発掘調査－』
第 11 集（2011）『窪田遺跡－経営体育成基盤整備事業（県営ほ場整備事業）に伴う緊急発掘調査－』
第 12 集（2011）『小原遺跡－特別養護老人ホーム増床事業に伴う緊急発掘調査－』
第 13 集（2011）『十郎田遺跡 1 －経営体育成基盤整備事業（県営ほ場整備事業）に伴う緊急発掘調査－』
第 14 集（2011）『十郎田遺跡 2 －経営体育成基盤整備事業（県営ほ場整備事業）に伴う緊急発掘調査－
SE66 井戸跡出土木製遺物編　附 十郎田遺跡出土木製遺物に関する自然科学的分析』
第 15 集（2012）『西屋敷遺跡－経営体育成基盤整備事業（県営ほ場整備事業）に伴う緊急発掘調査－』
第 16 集（2013）『前戸内遺跡－経営体育成基盤整備事業（県営ほ場整備事業）に伴う緊急発掘調査－』
第 17 集（2014）『磯ヶ坂遺跡－経営体育成基盤整備事業（県営ほ場整備事業）に伴う緊急発掘調査－』
第 18 集（2014）『蔵王町内遺跡発掘調査報告書 1（平成 18 ～ 24 年度）』
第 19 集（2014）『円田盆地の遺跡群 1
－経営体育成基盤整備事業（県営ほ場整備事業）に伴う緊急発掘調査＜総括編＞－』
第 20 集（2015）『蔵王町内遺跡発掘調査報告書 2（平成 25 年度）』
第 21 集（2016）『蔵王町内遺跡発掘調査報告書 3（平成 26 年度）』
第 22 集（2017）『蔵王町内遺跡発掘調査報告書 4（平成 27 年度）』
第 23 集（2018）『西屋敷遺跡 2 －農地整備事業（円田 2 期地区）に伴う緊急発掘調査－』（印刷中）

報　告　書　抄　録

ふりがな	ざおうちょうないいせきはっくつちょうさほうこくしょ５
書名	蔵王町内遺跡発掘調査報告書５
副書名	各種開発事業に伴う遺構確認調査（平成 28 年度）
巻・次	
シリーズ名	蔵王町文化財調査報告書
シリーズ番号	第 24 集
編著者名	鈴木 雅
編集機関	蔵王町教育委員会
所在地	〒 989-0892　宮城県刈田郡蔵王町大字円田字西浦北 10　TEL 0224-33-2328　FAX 0224-33-3831
発行年月日	西暦２０１８年（平成３０年）１月２０日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °　′　″	東経 °　′　″	調査期間	調査面積	調査原因
寺門前遺跡（てらもんまえ）	蔵王町大字円田字西浦北（ざおうまち えんだ にしうらきた）66-6	43010	05161	38° 05′ 59″	140° 39′ 12″	2016.6.24 ～ 2016.6.27	118.9㎡	個人住宅建築工事計画
上野遺跡（うわの）	蔵王町大字円田字東山（ざおうまち えんだ ひがしやま）47，49-2	43010	05016	38° 05′ 41″	140° 39′ 55″	2016.11.17	177.4㎡	太陽光発電施設設置工事計画
夕向原１号墳（ゆうごっぱら） 夕向原２号墳（ゆうごっぱら）	蔵王町大字平沢字屋木戸内 地内（ざおうまち ひらさわ やぎと うち）	43010	07180 07181	38° 06′ 24″ 38° 06′ 21″	140° 42′ 01″ 140° 42′ 03″	2016.12.21 ～ 2016.12.26	31.0㎡	遊歩道整備工事計画
宋膳堂遺跡（そうぜんどう）	蔵王町大字円田字見継（ざおうまち えんだ みつぎ）1-1，1-3	43010	05008	38° 05′ 59″	140° 40′ 31″	2017.2.21	26.9㎡	個人住宅建築工事計画

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
寺門前遺跡	散布地	縄文	土坑 32 基 柱穴多数	縄文土器 石器（二次加工ある剥片・剥片） 礫石器（石皿）	
		不明	なし	須恵器	
上野遺跡	散布地	不明	土坑 20 基 柱穴多数	なし	
夕向原１号墳 夕向原２号墳	古墳	古墳	墳丘裾部・平坦面	土師器 弥生土器	
宋膳堂遺跡	散布地	不明	溝跡１条	土師器 須恵器 縄文土器	

要約

平成 28 年度に実施した遺構確認調査について報告した。主な成果は下記の通り。

＜遺構確認調査＞

寺門前遺跡	縄文時代中期頃の土坑などを確認した。遺物は遺構確認面から縄文土器・石器などが出土した。
上野遺跡	時期不明の土坑・柱穴を確認した。遺物は出土しなかった。
夕向原１号墳 夕向原２号墳	墳丘西側の裾部が地山削り出しによって構築され、外周に平坦面が設けられていた可能性が考えられた。遺物は表土から土師器などが出土した。
宋膳堂遺跡	古墳時代以降の溝跡１条を確認した。遺物は溝跡堆積土から土師器・須恵器などが出土した。

印刷製本仕様

製　　本：A4 判（縦）、無線（あじろ）綴じ、並製本
ページ数：50ページ
印　　刷：表　紙　オフセット印刷、片面 4 色刷り、280 線
　　本文等　オフセット印刷、両面 4 色刷り、210 線
用　　紙：表　紙　コート 180kg（PP 貼加工）
　　本文等　マットコート 90kg
原稿形式：Adobe® InDesign® CS5.5（7.5.3）PDF/X-1a:2001
　　（OS : Microsoft® Windows® 7 Professional）

ISSN 2188-2525

蔵王町文化財調査報告書 第 24 集

蔵王町内遺跡発掘調査報告書 5

各種開発事業に伴う遺構確認調査（平成 28 年度）
寺門前遺跡・上野遺跡・夕向原古墳群・宋膳堂遺跡

２０１８年（平成３０年）１月２０日　印刷・発行

編集・発行　蔵王町教育委員会

〒 989-0892 宮城県刈田郡蔵王町円田字西浦北 10
ＴＥＬ 0224-33-2328　ＦＡＸ 0224-33-3831

印刷・製本　株式会社 グラフィック

夕向原古墳群から東に太平洋を遠望